
不思議の国のアイリス ~ Iris in Wonderland ~

ざしきのわらし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のアイリス〜Iris in Wonderland〜

【Nコード】

N2260K

【作者名】

ざしきのわらし

【あらすじ】

菖蒲^{あやめ}はどこにでもいるような高校1年生。しかし友達に誘われ『開かずの扉』を抜けたらそこは——不思議の国。様々な思惑が渦巻く中、『アイリス』の名を受け継ぎし少女の悲しき戦いが始まる――

— p r o l o g —

“二人の心”は“世界の心”。

“世界の心”は“二人の心”。

胸に刻むは希望の光。

秘めたるは絶望の闇。

二人を結びつけるは、心の運命^{さだめ}か。

はたまた神の残酷な遊び心か。

真相はピョコピョコうさぎのように扉の向いつ入消えていく。

そして君はもうその扉の前。

心の準備は出来てるかい。

出来て無いならお気の毒。

さあ開けて。扉を開けて。

君は不思議の国の運命を変えられるかな。

それとも運命に吞まれて闇に沈んで行くかな。

行ってみなけりや分からない。
どんな結末かも分からない。

あつ、さつきから喋ってるお前は誰だつて？

僕の名は“赤毛のノーティ”

“ノーティ”はいつでも困ってる人の味方だよ。

ふふふ。

“ 困っているヒト ”、のね。

さあ恐れずに前を見て。

“ アイリス ”

君にしか出来ないんだよ。

その手で扉を開けるんだ。

不思議の国の運命を握るその手で開けるんだ。

過去を探す為、 未来を開く為……—

card 1:いつもの日常

――あれ。

――さっきのは、夢……？

カーテンから溢れる温かい光。

しかし眠気を帯びた瞳は固く閉じられ、“朝”という現実から逃避する。

そして再び夢の中へ戻ろうとするが、秒差で目覚まし時計がビリリツとやかましく鳴り響いた。

5分置きのスヌーズ設定にしていたのをすっかり忘れていた。
これには少女もうめかすにはいられない。

――あああ。

――うるさい……。

腰ほどまで伸びた髪をばさつかせ手当り次第に頭上を叩く。

布団。クマのぬいぐるみ。ベッドの縁^{ふち}。そして目覚まし時計のポタン。

カチツという軽い音と共に騒音が途切れ、ほっと息を吐いたまま枕に顔を埋めた。

――やっぱりスヌーズは便利だけど二度寝の邪魔だね。

――今度から5分遅くに目覚まし設定しよつと。

“スヌーズ機能”とは二度寝をしてしまった時などの予備鈴。全

く機能を理解していない彼女は、気にする事なく渋々と起き上がった。

少女の名は『宮原 みやはら 菖蒲 あやめ』

高校一年生で今は祖母の家で暮らしている。

両親は共に行方不明。そういうのも15年前——真冬の寒い時期に祖母の家の前に菖蒲が置きざりにされていたそうだ。

ただ一言。

『ごめんなさい』と書かれた手紙と共に。

それ以来、二人の行方を知る者はいない。

それに菖蒲本人も両親を憎くんだ事はない——否、顔も知らない相手を憎みようがなかった。

祖母だつて愛情持つてここまで育ててくれたのに、その子供達を憎むなんてあまりにも可哀想だった。

菖蒲はベッドに座り込み、ぼおつと木張りの床を眺める。

大体四畳半ぐらいの部屋。決して広くないが、一人部屋には十分。窓辺にも、桃色のベッドにも、クマやらウサギのぬいぐるみが飾られている。

その中でぐったりとうなだれる菖蒲は、どうにかすれば働き疲れたくるみ割り人形のようにも見えた。

——あの夢は何だったんだろう。

つかの間の夢。

声が聞こえた。遠い夢の中、誰かが何かを話していた。

しかし夢ほど曖昧な物はない。

目覚めた瞬間は覚えているのに、たった数秒で記憶の花は散って行く。

——でも何となく覚えてる。

——私に、何を伝えたかったんだろ。

その者が自分の名を名乗っていたが今となっては思い出せない。
“扉”がどうのこうのと言っていたが全く思い出せない。
しかし菖蒲は別に気にしなかった。

——だって。

——私には関係ない。

そんな事を言われても何も出来ないのだから。

菖蒲は呑気に大きな欠伸をした。

だが欠伸を出しきる前に、老婆のしがわれた声が足下から昇りつめて来る。

祖母だった。

『菖蒲え、まだ寝てるのかいッ学校に遅れてしまうよ!』

下の階から叫んでいるので時より声がかすれている。

だがそんな事はどうでも良い。

「えっ今何時？」

菖蒲は慌てて目覚まし時計を手取る。

現在の時刻、七時三十分。

ちなみに七時四十五分からは先輩の“加奈りん”が迎えに来る事になっている。

それなのに未だパジャマ姿。

更に寝癖でバサバサの長い髪。

——や、ヤバイ。

血の気が引いていく。

“加奈りん”は怒ると怖い。待たせたりしたら空は快晴なのに、
菖蒲の頭上だけ血の雨が降りだすだろう。

もはや夢の事なんて考える余地も価値も残っていなかった。

——急がねば殺られるッッ

菖蒲はすぐ様下の階へ駆け出した。

自分の命がかかっているならば走らずにはいられなかった。
とりあえず時間がない。

「おばあちゃんツ学校の用意手伝ってええ！」

そう。

本当の意味でも、世界的にも……

『残された時間は少ない』



ぷすぷすう……。。

菖蒲の長く整えた髪から、正しく言えば頭から煙が出ている。

結局朝は間に合わず、何十分と待たされた加奈りんに思い切り殴られたのだ。なに加奈りんは驚異の速さでギリギリ登校し、遅刻したのは菖蒲だけ。

殴られて気絶し、道端で放置された菖蒲だけ。

そしてやつとの思いで1―A組のクラスまで昇って来たのだ。もはや1時間目が終わり、十分休憩に入ってしまったが。

――うう……。

――どれもこれもあの変な夢のせいだッ。

机に頭を伏せ、巨大なたんこぶを抑える。

たんこぶも痛い、今まで皆勤賞だったのにあんな夢のせいで崩れた事が、何より悔しかった。

「菖蒲……大丈夫？」

頭上から声が降りかかり、顔を上げた。

そこにはクラスメイトの女子。髪を下の方で二つに束ねた“かくら神樂”がいた。

「かあぐうらああ！」

「あつもつどうしたのよ」

困惑する神樂の小さな身体に抱きつき、状況を説明していく。

「変な夢見て、加奈りに殴られて、皆勤賞剥奪されて……」

「夢の中で殴られたのツてか皆勤賞まで剥奪うう？ でも夢の中だ

「つたならいいじゃない」

明らかに説明不足である。

しかし完全に信じきった神楽は困ったように頬を掻いている。真面目な子なので自分なりに解決策を考えているのだろう。すると何か思いついたのか、神楽はポンツと手を叩いた。

「菖蒲、そういう時こそポジティブにいかなきゃッ」

ぐつと拳に力を入れる神楽。

「私も落ち込んでいた時、お兄様に教わったの」

「えっ何を？」

「“人間は必ず失敗をし、その失敗を後悔して文明を広げていく”
って！」

——慰めがデ IPP 過ぎて重ッ！

思わずツツコミを入れたくなるが、神楽は真面目さに加えてブラコン。

あんまり言うつと泣き出してしまうかもしれないので、何とかツツコミは押さえた。

「なあに、あたしは仲間外れかい？」

不意に聞こえた足音。

本日の菖蒲へ血の雨をもたらした張本人が、にたにた笑いながらこちらへ向かって来る。

「加奈りんッ」

茶髪頭の加奈りんが、菖蒲の机にどかっとなり込んだ。

——いや。

——何で3年生の加奈りんがわざわざここに来る？

「よお菖蒲。今日は気絶してから一時間七分十三秒のお目覚めか最高記録おめでとう」

ケラケラと笑いながら加奈りんは菖蒲のたんこぶを摩った。

ちなみに旧最高記録というのは、四十九分五十九秒。何故殴られたかと言うと加奈りんが菖蒲にコンビニで『菓子パン買って来て』と言ったら……。

『“ガスパン”買って来て』

——と勘違いし、本当にホームセンターまで行って買って来たのが原因だった。

「おめでたくないッて。加奈りんが殴るから私の皆勤賞崩れちゃったじゃんか！」

「やかましい。あたしなんか毎年きんしん謹慎になっちゃうから皆勤取った事ねえしハハハハハハ——」

「ある意味笑い事じゃないアルヨ」

「あ、なんなら担任脅して遅刻を取り消してもらおうか」

「駄目に決まってるでしょ！」

菖蒲は加奈りんが本当に職員室へ殴り込みに行きそうだったので慌てて押さえこんだ。

傍らで見守る神楽は呑気に口元を隠して笑っている。

笑ってる暇があるなら手伝えと言いたかったが、口を開いた瞬間――手の中にいた加奈りんの感触が消えた。

「あっそうだ！」

両脇に腕を通すように加奈りんを確保していたが、しゅるりと身をかわされた。

油断しきっていた菖蒲は突然の事にバランスを崩し、鼻から床に激突。知らずと涙が視界を歪ませる。

加奈りんは詫びる様子もなく、しゅつと指を振り上げた。

「あたし、神楽と菖蒲に頼み事があつたんだ！」

「なに加奈ちゃん？」

「な、なに。加奈りん？」

首を傾げる二人に対し怪しく微笑む加奈りん。この時ばかりは加奈りんは無邪気な子供のように瞳を輝かせる。

でも、何となく嫌な予感がした。

『おう。実は旧校舎にあるという“開かずの扉”を開けて見ようと思っ
てなッ』

「……………」

「……………」

暫しの沈黙。

あまりにも唐突で、あまりにも馬鹿らしくて、あまりにもメリツトを感じられない提案。

これには隣に立つ神楽もひくひくと頬を引きつらせる。

菖蒲も硬直していたがわなわなと手を震わせた。

——そんなくだらない事……。

「勝手に一人でやってろおおツツ！」

「うおッ。菖蒲が怒鳴った！」

「あああ菖蒲落ち着いてッ」

頭から煙を出して怒り狂う菖蒲。まあ当然の反応だろう。神楽は暴れる菖蒲にしがみつきながら問題児に尋ねた。

「でも、なんでまた旧校舎なんて……」

正式名称・“清城高等学校旧校舎”。現在は老朽化の為使用されていないが『幽霊が出る』と、もっぱらの噂である。

しかし加奈りんは気にする様子もなく、満面の笑みを浮かべた。

「良くぞ聞いてくれました！ 昨日、ゲーセン仲間と遊んでたら話

題なつてよお。旧校舎の第二音楽室に“隠し扉”があんだって」

——ますます私らに関係ないじゃん。

菖蒲は大きくため息を吐きうなだれた。

「正式には第二音楽室を横断した楽器庫の中にあるらしいけど、それがまたどんなに引つ張つても押しても開かないそうだ」

「でもなんで加奈ちゃんがその扉を開けたいと……」

「あたしの勇気と力こぶを周囲に自慢してやるのさ！」

えっへん、と胸を張る加奈りに再びため息。

昔から知つてたが、加奈りんの探求心と自慢癖は相変わらず変わつていない。

無論、神楽も分かっているので不安そうに目線を泳がせている。

「で、でもお兄様も七瀬君も言つてたよ。そういうお化けが出る所や七不思議みたいな所は行かない方が良いつて」

「甘いぜ神楽ッ コーヒーに砂糖30杯入れた位甘いぜ！」

——いや。

——それはすでに『コーヒー味の砂糖』だよ。

「そいつらは遠回しに“夢を壊すな”つて言いたいのさ」

——嘘つけええッ。

——明らかに危険だからって忠告してるじゃんか！

「あ、そうか」

「神楽あんた何納得してんのよおお！」

バシッと神楽の頭を勢い良く叩く。

加奈りんのペースに呑み込まれ、つついッツコミが表に出てしまっ
まう。

叩かれた神楽は、ぐるぐると目を回して倒れ込んでしまった。
もはや一対一の対決。

「さあ菖蒲、神楽も納得したみたいだし今日の夜行くぞ」

「私はイヤッ」

「強情だな。もう多数決で決まっただから」

「イヤッたらイヤ！」

菖蒲は頬を膨らませながらぶいっつと横を向いた。

——そんな所に行ったら面倒な事になるに決まってる。

しかし加奈りんはにたにた笑っていた。

「帰りにアイス買ってあげるからさあ」

「まだ冷凍庫にあります」

「じゃあ今度コンビニでジャムパン買って来るからああ」

「私ジャムパン嫌い」

「……もしかして『怖い』の？」

その一言に菖蒲は再び加奈りんを見た。

「凶星？」

楽しむようにこちらを見て来る加奈りん。

確かに幽霊が出るという噂もある。怖くないと言えば嘘になる。でも『怖い』と認めたくなかった。

怒りや恥ずかしさのせいか顔がかあつと熱くなる。

「怖くなんかないもんッただ——……」

「じゃあ決定ッッ！」

待ってましたっと言わんばかりに加奈りんが大げさに手を叩く。迂濶だった。

「ちょっと加奈り……」

——キンコーン——

菖蒲の言葉を遮る授業開始のチャイム。

さっきまで話していた生徒達も急いで席に着き始めた。今や教室一杯に響くのは椅子を引くガタガタと言う音のみ。

その中で加奈りんは、小さく舌をだしながらウィンクした。

「じゃあ今日の夜待ってんぞ」

「待つて。私まだ行くなんて——……」

「後カメラ忘れんなよあたしが扉を開けている証拠写真撮んだから！」

一方的に用件だけ告げると、加奈りんは教室を出ていく。毎度の事ながらの授業放棄、恐らく保健室へ向かったのだろう。だが残された菖蒲は呆然とするしかない。

——私には、関係ないのに……。

そつだ関係ない

『扉』なんて関係ない。

『扉』なんか——……

——と、びら。

今朝の夢を思い出し、不思議と寒気が立った。

菖蒲は思わず自分の二の腕を握りしめる。

何かがおかしい。

偶然過ぎやしないか。

今日の夢と言い、加奈りんの誘いと言い、“扉”の話題がずっとつながっている。

まるで“扉”を目印に、菖蒲の歩く道を新しく建設されたような誰かが人生の地図を変えてしまったような。

菖蒲の人生が大きく狂って行くような。

——気のせい、だよな。

菖蒲は不安を隠すかのようにぎゅっと手を握る。

“大丈夫、大丈夫”。

そんな言葉をお守りにして——……。

card 2：開かずの扉

希望を忘れた旧校舎。

絶望に沈んだ旧校舎。

しかし今夜は客人がやって来る。

“希望”の名を継いだ『アイリス』がやって来る。

お茶の準備は出来たかい。

踊り子は呼んだかい。

後は笑顔も忘れちゃいけないよ。

準備が出来たら――

音楽を流して――

華やかに――

爽やかに――

君を出迎えよう――



——深夜午前二時。

周囲はどつぷりと闇に浸り、星々の輝きも黒い雲に隠れてしまっている。

その中、闇に沈んでも尚建ち続けている旧校舎。

生温い風と虫達の歌声を背負い、何十年も建ち続けている旧校舎。そして弱々しい校舎を守るかのように建築された石垣の前——数年ぶりの“客人達”が出陣の時を見計らっていた。

「おらあッいよいよ旧校舎に殴り込みだコラアア！」

「私、真夜中に出かけたの初めてだよオ」

真夜中だと言うのに大声で叫ぶ加奈りんに対し、ぱたぱたとはしやぐ神楽。

二人の声は深夜の街にキーキーと響き渡り、少し距離を置いて立つ菖蒲ですらやかましく思う。

加えて言えば、何十年と使用されていない廃屋と言っても近くには清城高等学校がある。

つまり騒げば騒ぐほど誰かに見つかる可能性が高くなるのだ。

——近くに警官や補導員がいたらと言う危機感はないらしいね。

補導の事も何も考えていない脳天気な二人に対し、菖蒲は大きなため息を吐くしかない。

そう。菖蒲達は昼間話題になった旧校舎の『開かずの扉』とやらを探しにやって来たのだ。

無論、半ば強制。菖蒲の良心はことごとく彼女達に無視された。

——私、ホントにこういうの嫌いなのに……

面倒な事に巻き込まれなければいいが、と思うが加奈りんが提案した『暇つぶし』で何も起こらなかった事はない。

必ず警官に見つかったり、近所のおばさんに怒られたり、先生に怒鳴られたり、その他もろもろ。

そして決まって謝るのは、事柄の被害者とも言えるはずの菖蒲と神楽。本人曰く、加奈りんは他人に謝るのが一番大嫌いだと自慢気に語っていた。

言い換えれば自分の非は意地でも認めない最悪な性格の持ち主だと思う。

——今日は何も起こりませんように。

菖蒲は諦めるように目をつむり、ぱんツと手を合わせ今日の無事を祈った。

「おおい菖蒲え。旧校舎侵入に備えて作戦会議しようぜ」

「菖蒲も円陣組もうよッ」

旧校舎の入口で、加奈りんが神楽の手をぶんぶん振りながら叫んでいる。

——いやいや。

——旧校舎侵入に作戦会議も何もないんじゃないの。

——しかも円陣組むって意味が分かんよ。

半分呆れ顔の菖蒲だが、苦笑しながら二人の元へ駆けて行く。
もう言い出したら止まらないのがクレイジーコンビ。

ならば――。菖蒲のすべき事は一つ。

旧校舎の入口まで行くと、既に肩を組んでいる加奈りんと神楽の間に割り込み、自分も肩を組む。

未だに円陣を組む意味が分からないが、これはこれで赴き（？）があるのかもしれない。

「来んのが遅えよ」

「いやぁ開き直るまでに時間がかかってさ」

「菖蒲は最後まで反対してたもんね」

いや、それは上手い具合に神楽が加奈りんに丸め込まれたただけだ。そうツツコミを入れたくなるが、また騒ぎになるのでやめておく。三人はニヤリツと笑い、夜の空の下――限界まで声を張り上げた。

「いいか菖蒲、神楽。絶対油断すんな」

「「おうッ」」

「何が起きても、扉は開けて帰るぞ」

「「おう」」

「そして忘れんな」

「「おう」」

『どの部屋に入る前にも必ずノックを』

「「お、おう!?!」」

『しかも2回だ』

——いちいち細けえッ!

「そして万が一、宙に浮く半透明な未確認生命体YUREI及び未確認生物OBAKEを発見した場合の話だが——」

「「……おう」」

——いや、普通に“幽霊”と“お化け”って言いなよ。

『捕まえて思い切り人間流パシリ地獄を味わせてやろうぜッ!』

「貴様いつぺん地獄に堕ちろオオ!」

「あ、菖蒲落ち着いてッ」

この時は知らなかったんだ。

不良の加奈りん。

優等生の神楽。

ずっと一緒に。

ずっと仲良しで。
ずっと笑い合って。

でも、今日で終わる。

この関係も。
この笑顔も。

全てが終わるから――……。



旧校舎内部は表以上に老朽化が進んでいた。歩くたびに床が軋み、酷い場合は床が抜けて足がはまってしまう。

まあ加奈りんが先頭を歩いていたので、ほとんどの危険部位を制覇してくれた。

おかげで菖蒲と神楽は無傷で廊下を歩く事が出来た訳だが、犠牲として加奈りんの足は青痣だらけになっていたりする。

「ちくしょ……全部終わったら旧校舎を火の海にしてやる」

――いや、ソレは流石にフォロー出来ないから。

よっぽど痛かったのか、加奈りんが涙目で呟く。

菖蒲は仕方がないので加奈りんの頭をポンツと撫でてやった。こっという所は子供ぽいっと言うか、なんと言うか。

しかも加奈りんは見取図も何も持つて来ずに、初めて来た旧校舎の音楽室へ向かおうとしているのだから驚きである。

無論、菖蒲が見取図をなんで持つて来なかったのかと尋ねると――
……。

『あたしは我が道を行くッ！ “道”は自分の手で、自分の目で、自分の足で見つけるからこそソレ相当の価値があるのだあ』

……と、意味が分からない論弁を述べ、すたすたと廊下を歩いていつてしまった。

本人はかつこいい事を言ったと思っているが、実際は行き止まりになったり、大量の鼠軍団に襲われたりとむしろかつこ悪い。

こんな調子で本当に音楽室に辿りつけるのか、菖蒲は再びため息をついた。

「菖蒲菖蒲え」

すると神樂がにこにこしながら、菖蒲の服を引っ張る。

朝までに帰れるか分からない状況で良く笑ってられるなあと、ある意味感心してしまった。

「なんか、『初めて加奈りんに会った日』を思い出すよね」

「初めて……加奈りん？ —— ああ、そっか」

そこで神樂の笑っている理由が分かり、菖蒲もつられて微笑んだ。

——そうそう。

——小学生のとき、加奈りと初めて出会った場所もこんな風に暗くてじめじめしてて……。

ずんずんと先を歩く加奈りんの背中を眺めながら、ゆっくりと昔の記憶を思い出していく。

……小学生の時、菖蒲は神楽を引き連れて良く『秘密の場所』へ行って遊んでいた。

誰も知らない。

誰にも知られない。

菖蒲と神楽だけの“秘密の場所”——だったはずなのに。

ある日、“先客”が来ていたのだから。

『ここはあたしが見つけた。ここがあたしの居場所だ。分かったら消え失せろ』

ボスッ。突然立ち止まった加奈りんの背中に菖蒲の鼻が埋まった。その衝撃で記憶の中の加奈りんがすっと消えていく。

「加奈りん……急に止まらないでよぉ」

「悪い。でも菖蒲、アレ……」

加奈りんがそっと白い人差し指を、自分の視線の先に添える。菖蒲も鼻を押さえながら、神楽も菖蒲の背中に隠れながら、その

指の先を見つめた。

——アレは……。

三人の視線の先——深い闇に包まれた廊下の突き当たり。
そこには金色の二つの光が、床より少し上を浮いている。

「ひゃッおおお化け！」

後ろに居た神楽が、奇声を上げて身体を震わせた。

しかも菖蒲の脇腹を持ちながら顔を伏せるので皮が引つ張られ少し痛い。

しかも加奈りんは加奈りんで。

「——シャアアッ上等じゃねえか！」

今にでも“光”を捕まえようと走りだす勢いなので冷静も何もない。

菖蒲は両腕を使い、二人の襟首を掴んだ。

「二人とも落ち着いてッ」

菖蒲の威厳ある怒声に、神楽と加奈りんがピタリと固まった。
そして、もう一度二つの光を見つめる。

——アレは、お化けなんかじゃない。

そう。菖蒲は初めから気付いていた。
神楽と加奈りんも、びくびくと光を見つめる。

良く見れば金色の光は少しずつ近付いて来る。

“鈴の音”を伴い、近付いて来る。

一歩ずつ、ゆっくりと。

雲に隠れていた月がゆっくりと出てくる。

割れたガラス窓から光が差し込む。

『んにゃー』

首輪に付けられた鈴をりと鳴らしながら、“赤毛の猫”が闇の切れ目から現れた。

三人は改めて深いため息を吐く。

「なあんだ猫かよ」

「でも赤毛の猫って珍しいよねッ」

さつきまで震えていたくせに、神楽は気にする事なくしゃがみ込み猫を呼んでいる。

加奈りんも苦笑しながらその隣に座った。

——とりあえず良かった。

——これで野犬だったらヤバい事になってたし。

まあその時は加奈りんが拳でなんとかしてくれるだろうが。
だが、菖蒲はふと視線を感じて辺りを見渡す。

無論、加奈りんと神楽以外誰もいない。

おかしいなあ、と首を傾げつつ前を見て気付いた。

あの赤毛の猫が、じつと菖蒲を見ている。

何故だかは分からない。しかしその金色の瞳に吸い込まれてしま
う。

二人の話声が水に潜っているかのように遠くに聞こえ、その猫し
か視界に入らない。

——『君の探している扉はこつちにあるよ』

透き通るような少年の声。

その言葉で、再び菖蒲は現実に取り戻される。

猫は、すつと菖蒲から視線を外した。

そして尻尾を悠々と降りかざし闇の中に戻っていく。

菖蒲は何が起きたのか分からぬまま、立ち尽くしていた。

——今の声は……。

「おい菖蒲ッ何ぼけえとしてんだよ」

「置いて行っちゃうよお」

加奈りんと神楽が、少し先で叫んでいる。

「なあ。あの猫捕まえて、あたしらの下僕に——」

「それは動物虐待ッ」

神樂が加奈りに珍しくツッコミを入れた。
しかし菖蒲は反応できない。
ずっと“あの声”が頭の中から離れない。

——あの声は……。

——夢で見た声と、同じだった。

あの猫が何者なのか。

あの声は何者なのか。

“扉”とは何か。

菖蒲はなんとなく分かっているのかもしれない。

自分が踏み込んではいけない領域に。

狂った運命の狭間に。

もしくは決められた運命に。
さだめ

誘われるまま、引き寄せられるまま、流れのまま。

近付いている事を……。



——ギイイイ……。

菖蒲達が、ゆっくりと音楽室の扉を開けた。

結局加奈りんの提案で赤毛の猫の後を追うことになり、今に至る。

もちろん赤毛の猫は素早しっこく、追いかけても追いかけても追いつく事はなかった。

だが加奈りんは持ち前の瞬足で廊下の端に猫を追い詰め、とうとう王手をかけた——と思ったが、そこは流石の猫である。

加奈りんが両手を上げた瞬間、さつと床下へと逃げ込んだのだ。

もはや猫捕獲の為、くねくねと廊下を曲がったので戻ろうにもどこが昇降口なのかも分からない。

意地になって廊下を更に進んだ加奈りんだったが、偶然にも“音楽室”に辿り着いてしまった。

——何だか……。

——凄く嫌な予感がする。

菖蒲は不安を隠すかのように拳をぎゅっと握り閉める。

やはり何もかもがおかしい。昨日の夢と言い、旧校舎の扉の話と言い、赤毛の猫だって——……。

まるでずっと昔から菖蒲が旧校舎に来る事を決められていたかのように、事が進み過ぎている。

——こうなったらさつさと“扉”を開けて帰ろう。

——面倒な事に巻き込まれる前に早く……。

菖蒲は決意を固め、加奈りんの後ろに着いて行つた。

視界に飛び込んで来た音楽室の内部は、想像以上に過去の原型を止めていなかった。

音楽室の要であるピアノの脚は折れ、椅子は綿が見えて黒ずんでいる。

生徒用の椅子も机も埃を被り、至る所に転がっていた。

一見、老朽化によりボロボロになったように見えるがこの状態は少し違うように見えた。

そう。

それはまるで、『何者』かが、第三者が、部屋を荒らしたかのような――。

「加奈りん、菖蒲。アレ見て見てッ」

神楽が机の下に転がっている白い欠片を指差した。
菖蒲は座り込みそつと欠片を手取る。
その少し上には同じ素材の取っ手が落ちていた。

「マグカップの、破片かな……」

しかも破片に重なるように液体が放射線状に広がっている。
しかもまだ濡れていて、蒸発していない。

――ついさっきまで。

――誰かがいたの？

薄気味悪さを覚え、菖蒲は欠片を床に戻す。

加奈りんもピアノの残骸部分で、何かを発見し菖蒲達に手招きしてきた。

「見ろよ、コレ」

加奈りんの冷たい声。

それはピアノの残骸を囲うように散らばる花。
色とりどりの美しい花。

しかしそれが今、踏み潰され、泥で汚れ、弱々しく床に散っている。

「ひどいッ」

神楽は思わず手で顔を覆った。

加奈りんは眉間に皺を寄せながら、花びらの一枚を手にとった。

「……まだ摘まれてからそんなに経ってない」

「ねえやっぱりおかしいよッ。誰もいないはずなのにお茶がこぼれてたり、花が散ってたり、それにあの猫だって！」

「ああ確かにおかしい。あたしらはここに来る途中誰ともすれ違っていない。それなのに何で、何で荒らされた跡が新しいんだ！」

加奈りんの拳がピアノに命中する。

ぐわんつと歪んだ音を発てて、ピアノの鍵盤が弾け飛んだ。

神楽は菖蒲の後ろに隠れながら、目を伏せる。

——そうだ。

——加奈りんは、花が荒らされるの凄く嫌いなんだ。

小学校の時——男子が花壇に悪戯して遊んでいたのを見た加奈りんが、再起不能になるまでボコボコに殴り大騒ぎになった事もあった。

しかし何でそんなに“花”にこだわるのか、加奈りんは言わない。聞いても、何も言ってくれない。

「許さねえ……。菖蒲、神楽ッ今すぐ旧校舎中をローラー作戦だ！」

「無茶苦茶だよッ見取図もないのにどうやって！」

「しらみ潰しに探せばなんとかなるッ」

「無理に決まってるでしょうがッ馬鹿言わないでさっさと帰ろ——
……」

『早く逃げて』

小さな小さな女の子の声。
複数の声が重なり、音楽室中に響いてくる——否、菖蒲の脳内に
直接響いているのだ。

『貴方は狙われてる』

『アナタは殺される』

『だから逃げて』

『あなたは死んではいけない』

『“希望”の名を継いだ貴方は死んではいけない』

——何、コレ……。

菖蒲は耳を押さえ周囲を見渡す。
しかし誰もいない。

加奈りんも神楽も、落ち着きの無い菖蒲を戸惑うように見つめるばかりだ。

『早く早く』

『奴らが来ちゃうよ』

『“絶望”の手下達がすぐそこに——』

——ガシヤアアアア

耳を裂くような音を発てて、窓が一斉に割れた。
加奈りんは直ぐ様二人の前に立ち、身構える。

「——えっ」

菖蒲は、思わず目を疑った。

闇のように黒い身体。

頭と手だけに詰められた鎧兜。

鋭い鉄鋼の爪。

闇夜に輝く、赤い瞳。

“刺客共”は、音楽室にひらりと舞い降りる。

菖蒲の顔が、極限にこわばった。

「逃げてッ」

言葉は自然と口から滑り落ちた。

加奈りんも相手が未知の生物と分かって、退却するしかない。

「——ッんだよあいつら！」

だが“刺客”は一斉に三人へ飛びかかる。

喧騒の中、化け物の一体が菖蒲を襲いかかって来た。だが菖蒲は手元にあつた椅子を振り上げ殴り倒す。

どうやら黒い身体はすり抜けてしまいが、鎧の部分には打撃技が通じるらしい。

加奈りんも気付いたらしく得意の鉄拳で“奴ら”を撃退していた。

「きゃああッ」

突然響いた神楽の悲鳴に、菖蒲と加奈りんは振り向いた。

“刺客”の一体が、床に伏せる神楽に鋭い爪を振り上げる。

——神楽ッ

間に合うか分からない。しかし、菖蒲は自分の首に下げていた力メラをそいつに投げた。

カメラはくるくる回りながら豪速で神楽の方へ飛んでいく。そして見事“刺客”に命中し、神楽から何とか引き離す。

——逃げるなら今しか……！

「神楽、菖蒲ッ早く！」

加奈りんが、二人の手を引いた。
他の“刺客”は不気味に身体を揺らしながら起き上がる。
いずれ追いつかれると思ったが、とりあえず逃げるしかない。
菖蒲は加奈りんの手を引かれるまま、引き戸を開けて音楽室を出た。

“音楽室を出た”はずだった。

しかし、そこに廊下はない。
薄暗く狭い部屋にあるのは大小様々な楽器ケースと、『扉』。
息を切らしながら、加奈りんは硬直している。

「おい……。な、んで教室から出てねえんだ」

何故教室を出ていないのか。

しかし、そのからくりには早く気付いたのは神楽だった。

「もしかして、加奈ちゃん……入り口間違えた？」

暫しの沈黙。

確か『開かずの扉』がある楽器庫は音楽室とつながっていると言っていた。

つまり恐怖による焦りから加奈りんも少なからずプレッシャーを感じていたとしたら……。

——まさか。

——加奈りんは、音楽室入口のドアと。
——『楽器庫のドア』を勘違いした？

三人の血の気が一斉に引く。

同時に楽器庫の扉を激しく叩かれた。

“奴ら”だ。

“奴ら”が追って来たのだ。

菖蒲は逃げ道がないか周囲を確認するが窓も換気口もない。
完全なる袋の鼠だ。

「加奈りんどうするのッ」

「あたしに聞くなッ」

菖蒲と加奈りんが口論している間にも、扉がぎしぎしと軋む。
すると神楽は楽器ケースを楽器庫の扉の前に積みながら二人を見た。

「『開かずの扉』を、開けるしか……ない」

逃げ道がないなら、自分で確保するしかない。

だが菖蒲は固まる。

薄々気付いていたのかもしれない。

“出口がない”、その時からもう避けられないと……。

——でも……。

菖蒲には『開かず扉』を開ける気にはなれなかった。

『扉』を開けたら、もう何もかもが手遅れになる気がして、開ける決心がつかない。

だが、加奈りんは動き出していた。

取っ手のない、中央から左右に開く型の『扉』。
その『扉』を、ある力全てを送り込み押し出す。

「菖蒲ッ手伝え！」

「加奈りん……」

「早くッ」

腕力自慢の加奈りんですら『開かず扉』は開かない。

足はすりずりと後ろに下がり、しまいには床に伏せてしまった。
菖蒲は、黙って目を反らす。

——わ、私は……。

「菖蒲えッ」

神楽が楽器庫の入口を押さえながら叫ぶ。

どんつと一定の速さで叩かれる度に、入口の前に置いた楽器ケースが少しずつずれていく。

突破されるのは時間の問題だ。

「あ、やめッ！」

加奈りんが『開かずの扉』を押しながら、菖蒲を呼ぶ。
張り詰めた空気。

二人の声が、夢の中の声が、菖蒲の中で混濁する。

『君にしか出来ないんだ』

「——っ！」

菖蒲は『開かずの扉』に飛びかかった。
助かる為には『扉』に賭けるしかない。
何かが起きたら、三人で乗り切ればいい。

「ひ、開けええッ」

だが、加奈りと二人がかりで押しても扉は開かない。
むしろ神楽の押さえている準備室の入口の方が開きかかっている。

——なんだよッ。

——私が押したって……。

——私を呼んだくせに……。

——『扉』なんか開かないじゃないかッ！

涙すらこぼれそうだった。

手は爪が剥げはじめ、激痛を伴いながら血が流れている。
それでも諦める訳にはいかない。

自分出来る事はこれしかない。

しかし、限界はすぐそこまで来ていた。

緊迫する準備室。

弾け飛ぶ楽器ケース。

入口に食い込む鋭い爪。

その切れ目から覗く、赤い瞳。

——早く早くッ！

菖蒲は涙目になりながら、尚も『開かずの扉』を押し続けた。

手の平でにじんだ血が『扉』に滴っていく。

血がゆつくりと錆びた溝を通り、下へ下へと流れていく。

その過程で、神楽が楽器ケースごと入口から弾き飛ばされた。

加奈りんの手の骨が軋んだ。

涙なのか汗なのか分からない雫が、菖蒲の頬を伝う。

それでも信じるしかない。

菖蒲達は祈るしかない。

“奇跡”を、願うしか……。

——お願い、開いて……。

菖蒲の血が、『開かずの扉』の中央にある小さな窪みに入った。

『血液認証。ほぼ同成分と判断。“アイリス”の血液と承認します』

機械的な声。

菖蒲の顔を照らす優しい光。

『開かずの扉』が、輝きだす。

「と、扉が——」

『ゲートポイント。K19・ホーリタウン。アイリスと同伴一名、合計二名の通行確認』

隣に立つ加奈りんも戸惑いを隠せず、訳の分からない言葉を聞かばかり。

『緊急事態時、緊急用B32・ゲートポイントを使用。侵入者の場合令状9条に基づきゲート爆破処置作動、爆破レベル“テラ”。設定変更なし。整備不良なし——ゲートを開きます』

何が起こったのか分からなかった。

菖蒲の身体がゆっくりと前に傾く。

その視界の中で、『開かずの扉』が左右に開いていくのが分かった。

「菖蒲ええッ」

冬の陽射しのような優しい光。

扉が開くにつれて光が楽器庫いっぱいに輝く。

「——アッ」

呼ばれて気付いた。

菖蒲の身体は『扉の中』へ落ちていく。

菖蒲は首を後ろへねじる。

加奈りんが必死に手を伸ばす。

一瞬の出来事なのに、二人にはとても長く感じた。

菖蒲は手を伸ばす。

友人に手を伸ばす。

加奈りんも扉の中に手を入れようと更に伸ばす。

後数センチ。

後数秒。

後一呼吸。

しかし次の瞬間、加奈りんの手が見えない何かに弾かれた。

——加奈りんッ

二人の手が、再び離れていく。

菖蒲の身体が、光へ落ちていく。

加奈りんが叫ぶ。

その後ろには、“奴ら”がいる。

戻れない。

帰れない。

二人が、危ない。

何で私だけが。

「神楽あッ加奈あああ！」

光の中。

菖蒲の涙ながらの咆吼が。

長年閉ざされていた『扉』を揺らす――……。。

card 3：出逢い

辺り一面に広がる色彩の絨毯。じゅうたん
花々の溢れる生命に輝く絨毯。

風が吹くたびにサラリと波打ち、緑色のなだらかな模様を打ち出す絨毯。

そして、大自然の花吹雪中で聞こえる“羽ばたき”。

——よしッ誰もいねえぞ。

天使のような大きな羽を持った少年が、空から舞い降りて来る。そう。“舞い降りる”と言つのも彼の背中に白く大きな翼が生えているのだ。

少年はぱさりと羽をたたみ、自然の絨毯の上に着地する。

ここは少年の『秘密の場所』。

もちろん、自然は皆のものだ。一人じめにしようなんて思っていない。

しかし、“この場所”の空気、青空、季節で変わる景色が少年にとって何よりも好きだった。

だから初めの内は、一ヶ月に一回のペースで。

しかし年を重ねる度に、一人になる時間が欲しくなり、暇があれば来るようになっていた。

だから、今日もまたやって来る。

街は、お祭りの準備で色々と騒がしかったから。

——やっぱりここが一番落ち着くなあ……。

——ま、暫くここで昼寝していてもバレやしねえだろう。

少年は一人頷くと、ごろんつと横になった。

同時に花びらが舞い、頬や服にくつついた。

風が音をたてて草花を揺らしていく。

大きく揺れたり、小さく揺れたり。その繰り返し。

少年は雲の流れを見ながら、花の歌声を聞いていた。

——いい天気だなあ……。

このまま草花と同化出来たらどんなに心地よいだろう。

少年は大きな欠伸をし、瞳を閉じる。

今はまだ昼。祭りは夜に始まる。

自分一人いなくても準備はちゃんと出来る。

だから風に誘われるまま、眠りに落ちようとした——……。

……ゴオオオッ

少年は思わず眉をよせる。

——何だ？

——風の音がおかしい……。

まるで落下物が迫って来るような抵抗音。

しかし“同族”で空から落ちる馬鹿はいない。

どうせ子供が遊んでいるのだからと寝返りをうつ。

……アあああッ

だが、再び聞こえた“音”。

否——“声”。

少年は横を向きながら目を開く。

——おい。

……きゃああああッ

これは明らかに悲鳴だ。

しかも声はだんだん大きく膨らみ……——

「きゃああああッ」

完全に人の声と分かるぐらいまで接近。

これは近い。

何かが落ちてくる。

今、自分の上に落ちてくる。

——おいおいおいおいッ！

少年は回避しようと起き上がる。

しかし起き上がった時には、もう遅い。

「うああああッ」

少年を覆う黒い影。

上を見上げれば目まで合ってしまった。

涙目で空から降って来る少女と。

これから全ての運命を握る少女と……——。

「ちょ、待っ——いぎゃあああ!」

べちゃ。

少女の身体で少年の顔面が潰される。
その衝撃で周囲の花びがひらりと舞った。
その衝撃で鼻がボキと嫌な音がした。
ついでに首もゴキと嫌な音がした。

——な、なんでこうなる。

びくびくと震えていたが、やがて力尽きて動かなくなった。
口からは大量のあわ。
鼻からは大量の血。

『バルト・スカルファーズ』

“生涯一番の厄年”



「あたた……」

菖蒲は、頭を抱えながらゆっくりと起き上がった。
未だぼやける視界をこらし、周囲を見渡す。

——ここは……？

見渡す限りの草原——否、“花畑”と言った方がふさわしい。

爽やかな清風。

香り豊かな花々。

終わりの見えない青い空。

この風景に誰もが天国か夢だと思うだろう。

もちろん、菖蒲は夢であって欲しいと願った。

しかし、“あの時”爪のはげた指が今更になってズキズキと痛みだす。

つまり“痛い”と感じるという事は、残念ながら夢ではないという事だ。

——ゆ、夢じゃない。

——って、私はあれからどうなったんだろう。

確か『開かずの扉』が開き出し、菖蒲だけが扉の向こうへ落ちてしまった。

ひたすら光の中をさ迷い、気が付いたら菖蒲は青空を急降下していた。

本気で焦って、もがいて、無駄だろうが手を羽のようにばたつかせた。

しかしもう駄目だと諦めかけた瞬間、丁度何かがクッションになつてくれて……。

「あ、あれ？」

不意に覚えた違和感。

——わ、私。何の上に着地して……。

ぬつ。スカートの下から現れた手。
その手は菖蒲の足を握る。

「——一つ。貴様は俺の昼寝を邪魔した」

足元から聞こえる若い男の声。

「——二つ。貴様は俺の顔にスカイダイブしてきた」

ガタガタと震え出す菖蒲。
不気味な寒気が、背中を這い上る。

「そして三つッ」

菖蒲の足がゆっくりと横にずらされた。
下を向けば、鼻血を大量に流す銀髪短髪頭が菖蒲を睨みつけている。

もはや菖蒲の恐怖は限界にまで膨れ上がっていた。

「気が付いてから一言も謝罪しねえで、何を呑気に回想してやが——
……」

「キヤアアアッ痴漢！」

まさに秒殺。

バルトが言い終える前に加奈りん直伝のキックが顔面に食い込む。
いきなりの奇襲に、バルトは防御すら出来ずに――……。

「おぎゃあああすッ！」

声を上げて花畑を転がり、向かいの木に激突した。

菖蒲はガタガタと震え、目の前に転がる屍を見つめる。

本人的には立派な自己防衛だったらしい。

「――おいてめえ待てこんにやる、さっきの蹴りいらねえだろッしかも何が痴漢だ！」

「私のスカートの下で寝てたじゃないッ」

「馬鹿言っなッてめえが俺を踏んでたから動けなかったんだよ！」

「鼻血出してたくせに！」

「それはめえが俺の顔にスカイダイブして来たからだああッッ」

にぎぎ。お互いが息を切らしながら、睨み合う。

傍らで聞いていれば何とも馬鹿らしい会話だが、今の彼らにはそんな事を気にしている場合ではない。

すると菖蒲は首を傾げつつ、ずびしと指を差した。

――てか……。

「あんた誰！」

「そりゃ、こっちの台詞だボケえッ」

バルトは呼吸を忘れるくらい大きな声で叫んだ。
命の恩人に向かつて、つくづく失礼な女である。

しかし菖蒲は全く悪びる様子もなく、バルトの容姿を上から下まで眺める——まるで何かを吟味するように。

じっと見つめてくる少女に、バルトは思わず後退った。

「な、何だよッ」

「……目つき悪いなあって」

……。

……………。

「い、今言う必要があるかあッ!? お前無意識に敵作るタイプだろッ絶対そうだろ!」

「あのね。目つき悪い人は目をつぶって、いつもニコニコしてればそれなりに見えるって聞いた事が——」

「大きなお世話だッ!」

バルトはケツと唾を飛ばし、その場に座り込む。

「……」

一通り口論し、ぷつぷつ切れてしまった会話。

そのかわり二人の間に流れるのは気まずい沈黙。

無論、話すべき事はたくさんあるのだが散々罵倒し合った後ではどうにも会話を切り出せない。

時が過ぎる毎に気まずさは悪化し、冷や汗まで噴き出てきた。

——ど、どうしょ。

——聞きたい事は山ほどあるのに、話が……。

「お、おい」

最初に口を開いたのはバルトだった。

「お前、名前は？」

その問いに答えようと口を開くが、つい先日観たスパイ映画の話を思い出し口を閉ざした。

「……そ、そっちらから名乗ってよ。私から情報を引き出すだけ引き出して『用済みだッ』とか言われていきなり殺されたらヤダし……」

「俺を何だと思ってるんのッ言っておくけど俺は被害者だからな！」

せっかく話題を振ったのにと、バルトはチツと舌打ちをする。
そしてため息を吐きつつ、胸ポケットから銀の塊を取り出した。
片翼のバッチだ。

「……話が先に進まねえからもう良い。俺は治安課所属の“バルト・スカルファーズ”。種族は“鳥”だ」

——治安課？

——種族……って何。

思わず頭にハテナを浮かべる菖蒲。

しかし直ぐにバルトの言っている事を理解する。
だって“それ”は、彼の背中に生えていた。
二人の間に突風が吹く。花びらが舞う。
木の葉が舞う。

そして――

“白き羽”が、菖蒲の視界でひらひらと踊る。

――ああ……ッ。

目の前で、ばさりと広がる白い翼。
バルトの背中から大きな翼が、風を受け、今にも飛び出しそうな
程に羽ばたきだす。

――は、羽が……。

開いた口が塞がらないとはまさにこの事。
菖蒲は震える指でバルトの翼を指差す。

「何だお前。“鳥族”も知らねえの？」

バルトは翼をばたつかせながら鼻で笑う。
しかし菖蒲には、ただ彼を指差す事しか出来ない。

「ただだって、はは羽が――」

「俺達“鳥族”は、“鳥の血”を継いだ者だ。なんつーか、人間で
もないし、鳥でもない。勿論ハーフでもない」

人間でも、鳥でも、ハーフでもない存在。

「例えば『犬』が『犬』のように、『人間』が『人間』のように、俺達も『鳥族』が『鳥族』のように、元からの種族として生きている」

つまり、生物図鑑を開く。

“タ行”で探していく。

そして“ト”の蘭に、『鳥族』という項目があると言うことだ。

「勿論、鳥族の他にも“花族”、“魚族”、“猫族”とかたくさんいるけどな」

加えて、この一言。

菖蒲は目昧すら覚えた。

あまりに飛躍した話について行けない。

「——でも、今まで良く人間に見つからずに生活出来たね」

しかし、バルトは首を傾げるばかり。

「はあ？ 何言ってるんだお前」

「だって、人間に見つかったらマスコミに騒がれるし、研究者だつて出てくるかもしれないし……」

確かに一理ある。

人間に見つかれば、ただでは済まない。

マスコミは大きく取り上げ、研究者も我は我よとたかってくるだろう。

それはまさにハイエナの、素早く、しつこく、残酷に獲物を喰う様のように。

しかしバルトは呆然と菖蒲を見てきた。

「だから何言つてんだよ」

その視線はまさに常識のない奴を見るように……。

呆け始めた奴を見るように……。

しかもその口から発せられた言葉はあまりに衝撃的で。

『見つかるも何も……。人間なんてこの世界にいる訳ねえだろ』

菖蒲は言葉を見失う。

頭が真っ白になる。

「は、ははは……」

もはや笑うしか心の逃げ道はない。

菖蒲は静かに首を横に振る。

「そ、そんなはずないっ。ただって、私が――」

――私は、“人間”だもの。

「でも俺、“人間”なんておとぎ話の中でしか聞いた事ないしい」

そう言いながら、バルトは首をすくめる。

まるで自分にあたられても困る、とでも言っているかのようだ。

——じ、じゃあ……。

——仮に人間がいなかったら。

「“ここ”は、どこなの……」

菖蒲にとって今一番に重い問い。

しかしバルトにしたら、完全に馬鹿としか思えないだろう。

実際に菖蒲だって、日本で日本人が『此所ドコデスカ？』なんて聞いたら、頭のネジが一本抜けてないかと疑うに違いない。

「……お前、頭大丈夫かよ。」

現に、バルトにはそう見られている。

でも、バルトは付き合ってくれた。

ちゃんと、答えてくれた。

『“ここは“不思議の国”。色彩の街“ホーリータウン”だ』

菖蒲には、とても残酷な真実だったが……——。



菖蒲達が立ち尽くす花畑の上。
そこから幾分も離れていない木の上に一人の少年が座っている。
赤毛で、頭には猫耳が付いており、お尻には長い尻尾まで。

「——とりあはず君をここに連れてくるのは成功したね」

少年は一人微笑む。

「まさか“デイスファイア”に邪魔されるとは予想外だったけど……」

少年は鳥族と話す菖蒲を遠目で見つめた。

やはり“似ている”。

もはや同一人物と言っても過言ではないように。

「……君には“アイリス”の名を継ぐ資格がある」

その目は、もう菖蒲を見ていない。

彼の意識は知らずと遠い昔の、昨日の事のような記憶の中に沈んでいく。

その中で“少女”の名を呼ぶと、いつも笑って答えてくれる。

『じゃあ貴方は“ノーティ”でどう？』

名のない自分に、名をくれた。

『“赤毛のノーティ”……悪戯好きな貴方にぴったり』

“少女”はまた笑った。
初めて見た、素直で素敵な笑顔。
その笑顔を守りたかったのに……。
ずっと傍にいて欲しかったのに――。

「僕は、もう戻れない」

ぎりつと、齒を噛み締め記憶を打ち消す。
今は過去にとらわれている場合じゃない。
前を見て、自分に出来る事をするだけ。

「さあて、もう一押しするかなあ」

木の上で、少年は大きく伸びた。
そして木から飛び降りようとするが、ぴたりと立ち止まる。
彼自身、いきなり菖蒲を一般から引き抜いて悪いとは思っている。
しかし菖蒲にしか出来ないのだ。
“アイリス”の名を継ぐ、菖蒲にしか――……。

「本当に……。僕一人じゃ、何も出来ないんだ」

少年は悲しみを振り払うかのように尻尾を振り上げ、そのまま地面に着地する。

そしてゆつくりと歩きだした。
その背中に全てを抱え歩みだす。

過去を背負いながら――

“名前”を背負いながら――

“アイリス”への想いを、隠しながら――……。
もう、振り返らないと決意を固めて――……。

card 4：ホーリータウン

砂利をざくざくと踏みしめ、黙々と歩み進める二人の男女。

男の方は、女の身長より多少大きいだけでそんなに変わらない。

しかしこの男——実は“鳥族”とかいう民で、自分の身長程もある大きな翼がある。

何故飛べるのに地面を歩いているかという、相手の女には“翼が無い。”

まさか自分一人だけぴゅーと飛んで街に帰る訳にも行かず、仕方なく歩いている訳だ。

——うーむ。

だが、女は“人間”。翼など持っていた方がおかしい訳で——…。

——う、うむ。

それに気付かない男——バルト・スカルファーズは大変頭を悩ませていた。

「なあ、お前何族なんだよ」

女は目を伏せ、黙り込む。

さっきからずっとこの繰り返し。何を聞いても、黙り込み、目を合わせない。

初めはバルトへ何かとつかかて来たのに、今ではすっかり大人しい。

——どうにもこういう空気は吸いなれねえ……。

バルトは目を泳がせ、困ったようにポリポリと頭を掻く。

「じゃあどっから来たんだよ、空から落ちて来るなんて尋常じゃねえだろ。両親とか……友達は近くにいないのか」

「う……うっ」

気付けば、女は涙目。

鼻をすすりながら必死に溢れ出しそうになる感情に堪えていた。
この様子に、バルトは目玉が飛び出しそうになる。

「うわあああッわわ分かったから泣くんじゃねえ！俺が泣かしたみたいだろうが」

——まあ俺が泣かしたんだけどさあ！

柄にもなくオロオロと戸惑うバルト。

両手を振り上げ、女の周りを回っている姿はなんとも怪しい。

——ああ……やっぱ今年は厄年だあ。

——つか、泣きてえのこっちだし。

何とか落ち着きを取り戻した女の背中を叩き、バルトは大きくため息を吐いた。

改めて女の外観を見ると、大人っぽさ漂う横顔からは十代後半の女性にしか見えない。

しかも風が吹く度に長い髪から漂う甘い香り。

思わずドキツとし、顔を反らした。

——何ときめいてんだ俺ッ

——相手は何を考えてるか分からない馬鹿女だぞ！

しかし、ここでバルトは気付いた。

“何を考えているのか分からない”

もし仮に、本人自身が“何も分かってない”としたら……。

——いや、そんな馬鹿な。

——でも……。

根拠ならある。

彼女は何族かも、何処から来たのかも、両親も、友人の事さえ教えてくれない。

しかも鳥族の翼を初めて見たような、あの反応。

この世界で“鳥族”を見た事が無いという人が居るとは考えられない。

——まさか、この女……。

バルトはごくりと唾を飲んだ。

——“記憶喪失”ッ！

全く事実と反しているが、ここまで思考を巡らせた彼に拍手を送ってやりたい。

だが、仮に記憶喪失だとしたら（バルトの勝手な思い込みだが）、今後どうしたら良いのか分からない。

現に何を覚えているのか、全く検討もつかないのだから。

——そういえば……。

バルトは、まだこの女の名前を知らない事に気付く。
面倒くさそうに頬を掻きながら、小柄な肩を掴んだ。
急に止められた女は、目をぱちぱちさせる。

「えーと……。お、お前名前は？　そういやまだ聞いて無かったよな」

先ほどのアドバイス（？）通り、なるべくにこやかな顔を作ったつもりだった。

ぴくぴくと頬が引きつる。

女は黙って男の顔を見上げるが——……。

「……はあ」

何故か吐き出されるため息。

——は？

硬直するバルトを追い越し、女は平然と歩き出す。

——な、何だ今のため息は……。

——ちよつと失礼だろ。俺頑張ったのにそれは無いだろう。

怒りを通り越して泣きなくなるバルトだが、気を取り直して再び女の肩を掴んだ。

「ちょっと待てよッ……だ、だって俺は嫌だぞ。なんつーか、女の子を『お前』とか呼ぶとか……偉そうだし」

「……自覚合ったなら呼ぶなよ」

「ああ、すみません——ってテメエ今なんか言っただろッ」

やっぱり確信犯かッとバルトが拳を振り上げると、慣れた様子で女は素早くかわす。

そして、二歩先まで距離を置いて呟いた。

「菖蒲」

微かに女は笑っていた。

バルトが初めて見た、菖蒲の笑顔だった。

一瞬頭が真っ白になり、バルトは思わず硬直する。

「……アヤメ？ お前アヤメって名前なのか」

女は——菖蒲は、何も答えずにただ歩いていく。
チェックのスカートが、風でひらりと揺れる。

——アヤメ……。

バルトは、ハッと我に帰った。

そして、彼女の正体に気付いた。

——分かったぞッ。

——アイツは、“花族”だ！

再び自分勝手な推理勃発。

——花族は何かと“花の名前”をつけたがる。

——花族ならば翼が無くても納得できるしな。

一人頷き、我ながら見事な推理力に酔いしれる。

しかし、全く事実の反している事に気付かない姿は何とも哀れだ。
すると菖蒲が街の入り口で立ち止まっている。

「——ねえ」

それは、まさに不審者を見るような呆れた顔。

そして首を傾げながら、憎たらしい一言を吐き出す。

「一人でブツブツ言ってるって怪しいよ、えーと……“ベルト”君？」

——“ベルト君”？

「……で、俺は“ベルト”じゃねえッ“ベルト”だあ！」

バルトは怒鳴りながら、全力で菖蒲に駆けていく。

菖蒲は直ぐ様、街の中へ駆け込んだ。

「あれ？　ベルトじゃ無かったけ」

「バルトだああコラあ！」

「あつ“タルト君”か」

「デメエ、ワザとだろう！」

バルトは怒りに身を任せ、足では菖蒲に追い付けないので翼を使った。

菖蒲が気付き反則だのと文句を言って来るがお互い様だ。

二人の怒声が、ぎゃあぎゃああと街中に響き渡る。

バルトはこの時気付かなかった。

色彩の街、『ホーリータウン』で。

祭りを控えた、『ホーリータウン』で

『出会い広がる、始まりの街』で……。――

皆の物語が一斉に動きだす事に――



「うわぁ……！」

街に入った菖蒲は、思わず目を輝かせた。
西洋風の建造物。

溢れるばかりの活気と、花の香り。

そして特に、菖蒲の目を奪ったのが――。

街の中心で弧を描く二段噴水。

その噴水の周りに縁取られた七色のチューリップ。

水しぶきが花びらにくつつき、雫がつるりと滑り落ちた。

これを美しいと言わずになんと言っだろう。

——キレイ……。

——加奈りんや神楽にも、見せてやりたかったなあ。

呆然と噴水に見取れていると、いきなり肩を叩かれた。

「や、やっと追い付いた」

バルトだった。

ぜえぜえと息を切らしながら羽をたたむ。

飛んでいても疲れるんだなあ、菖蒲はある意味感心した。

「ねえ。この噴水って何？」

「ああ？ これはホーリータウン観光名所『レインボーティア』だ」

『レインボーティア』——直訳すれば『虹の涙』。

どついう由来なのかバルトに尋ねようとした所、彼が先に答えてくれた。

「今から二十年以上前——『虹の使者』がこの国に現れて“邪”を

取り除いてくれたんだ。その時に、二度と“邪”がホーリータウンに訪れぬよう自分の涙を噴水に変えた。以来、ホーリータウンは平和を維持してるっていうおとぎ話さ」

菖蒲は驚いたようにバルトを振り返る。

「おとぎ話なの？」

「だって俺は信じてねえし。だいたい涙を噴水にするって、そいつ脱水症状で死ぬから」

——夢を壊すな夢を！

ふんつと鼻で笑う馬鹿鳥に、菖蒲は殺意さえ覚えた。

だいたい観光名所には、そういう言い伝えが無い方が珍しい。

まあ菖蒲がバルトの立場だったら同じようにツツコミを入れるだろうが。

菖蒲は笑みを溢しつつ、悲しげにため息をもらした。

街に来たら何か分かるかと思っただが、見かける人は全て鳥族などの人間界には存在しないもの。

また落ち込みそうになるが、バルトにはこれ以上心配をかけてはられない。

彼は彼なりに見知らぬ自分に気を使ってくれていたのを、菖蒲は気付いていたから。

「何だか元気ないねえ」

凶星を指すような一言。

「そんな事ない……」

「だって寂しそうだよ？」

「……寂しくなんかない」

「寂しく無かったら、そんな顔しないよ」

「バルトしつこい！」

涙を堪えながら、隣にいるバルトを睨む――が、バルトはきよんとしていた。

「はあ？何言ってるのアヤメ」

「な、何……って。今なんか――」

振り返ろうとして、頬に人差し指がむにゅっと刺さる。

「わぁいッ引つかかったぁ！」

同年代の男の子だろうか。

茶髪に赤い瞳。

前髪を真ん中で分けて、眼鏡をかけている。

そこまでは普通の子。

なのに――。

「バルトお。なぁに祭りの準備サボってデートしてるのさ」

彼の耳は、ウサギだった。

「う、ううウサ——」

「あ、どうもあ。 “ウサギ族” の『グリフ・カークランド』と申します」

グリフと名乗る少年は、くるりと手を前で回しながら華麗にお辞儀する。

隣のバルトはケツと唾を飛ばすが。

「……何でお前がいんだよ」

「あら。ボクは君に “情報” を教えに来ただけさ。そしたら女の子とデート中で——……」

「デートじゃねえよ！ てか、訳ありでさ……」

がしつと、グリフの肩を組み道端に移動するバルト。

何やら密談らしい。

菖蒲は自分の事を言われていると気付き、困ったように目を反らした。

「実は空から落ちてきたんだよ」

「君がかい？ だっせえ」

「ちげえよバカ。あの女だ」

ブツブツと密談が始まってから、約三十秒が経過するとグリフが振り返った。

ずんずんと歩みを進め、菖蒲の手を握る。

突然の事に驚き、身を退こうとするがグリフの手がそれを許さない。

菖蒲は、ピクピクと眉を痙攣させた。

「あ、あの……」

「アヤメちゃん。辛かったね」

ぐしっ。涙をすすするグリフ。

「ああ君は何も言わなくて良い。ボクはちゃんと分かってるから」

「あああの……」

「辛いと思う。バルトが呑気に昼寝をしている間、君は涙を流して助けを呼んでいたんだ」

「え、えーと」

「それなのに君は悲しみを忘れ、忘れた事さえ忘れている。でも決して弱音を吐かない君。ボクはそんな君を愛しています付き合っ下さ——……ぐほおッ」

そのままキスをされそうな勢いだったので、すかさずグリフの顔面に鉄拳を放つ。

初対面にして、こんな馬鹿げた告白なんて受けた事がない。

——あいつ……。

——何言っただよ。

反射的にバルトを睨むが、俺は知らないとはかりに首を振っていた。

「まあグリフはお節介好きだけど、悪い奴じゃないから」

——でも、変わった人（？）だよネ……。

菖蒲は、声ならぬ声でツツコむ。

グリフはハンカチで鼻血をふき取ると、再びバルトに向き直った。

「事情はだいたい分かったよバルト」

「おーそりゃ良かったな」

——いや、全然分かってない……。

「あ、そういえばバルトに伝える事があったんだよね」

いけないいけない。グリフはヘラヘラと笑みを零す。

同時に三人を覆う黒い影。

何やらばさばさと羽ばたきが聞こえてくる。

——何？

「君の親父さんがねえ」

グリフが、満面の笑みで真上を指差した。

何やら声が聞こえる。

男の人で、何かを叫んでいる。

「ばあるうとおお」

バルトは本能的に青ざめていた。

——何か、落ちて来てない？

嫌な予感があった菖蒲は真上を見上げる。

逆光で見えにくいのが、翼の生えた男がこちらに急降下してくる。

銀髪の男が、今バルトの元に向かって落ちてくる——……。

バルトはがくがくと震えながら空を見上げた。

「バああルううト！」

鳥族必殺！

『スカイダイブハグ』。

「い、いや——ギニヤアアアツ！」

バルトが落下の衝撃をまともに喰らい、砂埃に包まれる。

その風圧で菖蒲のスカートが、ぶわりと捲り上がる。

グリフは相変わらず笑っていた。

街の人々も何事かと、ざわざわと顔を出したり、見に来たり。

そして砂埃が晴れて来ると、顔を真っ青にしたバルトが——……。

「バルトオ。父さん心配したんだぞおー全く困ったちゃんだなあ」

鳥族親父に抱きしめられていた。

菖蒲はただ呆然とするしかない。

隣のウサギ男は、呑気に手を叩く。

「そうそう。君の親父さんが探してたんだよ！」

今更遅い“情報”を屍状態のバルトに提供。

どうやら落下して来た男は、バルトの父親らしく見ての通り親バ力。

意識を取り戻したバルトは、慌てて父親を突き離れた。

「——テメエ、俺を殺す気が！」

「何を言うか。愛を確かめ合うにはアレぐらい過激な抱擁が——」

「息子を殺しはぐる抱擁のどこが愛なんだよコラア！」

菖蒲もバルトに落ちて来た身なので、人の事は言えないが静かに頷く。

しかも、この親父さん。天然なんだが技となのか全く詠めない。

まあ、こんな父親なら必然的に口うるさい息子に育っても周囲は文句も言えないはずだ。

「しかもねえ。バルトの親父さんは、ホーリータウン町長でもあるんだよ」

グリフが欠伸をしながら呟いた。

菖蒲は思わず目を見開く。

「町長って……あのおじさんが？」

「うん。やっぱり見えないよね」

——見えないって言うか……。
——あんな人で良く街が潰れないなあ。

さりげなく失礼な事を考えるが、それも事実だろう。
あの親バカっぷりに、何故誰も指摘しないのだろうか。
いい加減、指摘してやるのも優しさだと思っただが。

「じゃ、ホラ。父さんと一緒に祭りの準備をしようじゃないか」

「ちょ……待てって」

手を引こうと伸ばしてくるが、バルトは直ぐ様身を引いた。
そして菖蒲とグリフの所に戻ってくる。

「俺はこれからコイツらと“百合”の所に行く」

百合とは誰なのかも分からないが、初耳な発言にグリフはギョツ
と目を見開く。

「え。そんな話聞いて——ぐはッ」

反論する前にバルトの肘がみぞに入る。

しかしバルトの父は、じっと三人を見つめていた。

「だから、俺とグリフは祭りの準備は出来ねえのッ」

「な、何でボクまで……」

自信満々に菖蒲とグリフの肩を組むバルト。
するとバルトの父は、静かに歩みよる。

微かに顔をこわばらせながら、震えを堪えながら。

「——え」

息子ではなく、菖蒲の元へ。

「君……名前は？」

菖蒲は、バルトの父のただならぬ様子に怯えながら、震えた声で答える。

「あ、菖蒲です」

「ア……ヤメ？」

バルトの父の表情が穏やかになる。

誰かと勘違いでもしていたのだろうか。

ため息を吐くと同時に、バルトが慌てて二人の間に入った。

「こ、この子は花族の子で。最近引越してきたらしくてさ……なあグリフ！」

「そうそうッ」

グリフまでが、菖蒲をバルトの父から引き離す。

——なんか知らないけど。

——私、『花族の人』って事にされてる……。

まあバルト達は菖蒲をフォローしてくれているのだから、自分は

下手に話さない方が良さだろう。

バルトの父は、菖蒲に微笑み直した。

「私はこの街の町長、『ヘレン・スカルファーズ』。困った事があったらいつでも頼っておくれ」

ヘレンは手を差し出し、菖蒲に握手を求める。 菖蒲は何となく戸惑っていたが、ぎこちなく手を伸ばした。

ヘレンの温かく、大きな手。

うらやましいくらいの父親の手が、菖蒲の小さな手を包み込む。

「さあて。私は仕事に戻らねばいけない」

握手を外し、ヘレンは苦笑いしながら、腕時計を眺める。
どうせ仕事を抜け出して来たんだろう。

「バルト、日が暮れるまでには噴水前に戻るんだぞ」

「分かってるって。祭りが始まる前には戻るさ」

では、よろしい。ヘレンは翼を広げる。

バルトよりも大きな翼だった。

そして、去り際に小さく呟く。

「アヤメちゃんを、ちゃんと守るんだぞ……」

バルトは良く聞こえなかったらしく、目を細めた。

「んあ？ なんだ聞こえねえよ」

「聞こえなかったなら良いんだ。じゃあ祭りに遅れるなよッ」

いきなり現れて、好き放題やって、いきなり帰る。

まさに台風のような不思議な人。

バルトはそんな父親の背中を見上げ、首を傾げた。

なんだか、いつもと雰囲気違っていたのだろうか。

——私には、分からないけど……。

でも、と思う。

ヘレンが近寄って来た時に。

あのこわばった表情が。

何か面影を探すような眼差しが。

ちよっぴり、怖かった——……



「……似ている」

大きな空の中、ヘレンの声がぼとりと落ちる。

彼の頭の中に蘇るのは、数十年前に現れた“友人の姿”。

顔も、声も、身長も、全てが似ている。

しかし彼女は、もうここにはいない。

居たとしても、自分と同年代だ。

四十歳は完全に過ぎている。

だから――。

「考え過ぎ、か」

ヘレンは微かに苦笑しながら、翼を少し傾けた。

模型のような小さな街は、再び大きくなっていく。

ヘレンが着地するのは、街の南にある町役場。

まだやっていない仕事如山ほどある。

風を受けながら、下降して行く。景色を受け流しながら下降していく。

しかし、何かがおかしい。

「なんだ……？」

役場が見えて来たと同時に、周囲を囲む“黒い塊”。

銀色の鎧兜を被った、謎の集団。

落下すればするほどに、赤い瞳まで見えてくる。

「まさか――」

そんな馬鹿な、奴らは“滅んだはず”。

目の前の現実が信じられず、背筋に気味の悪い寒気が走る。

二十年以上前の記憶が、再び悪夢となって蘇る。

だから気付かなかった。

迫り来る、“奴ら”に。

「なッ——」

宙に飛び上がった“鎧の使者”。

赤い瞳をぎらつかせ、今、目の前にいる。

ヘレンの、目の前にいる。

表情こそ分らないが、にたりと笑ったように見えた。

鋭い鋼の爪が、大きく振り上げられる。

避けきれない——ッ

シュッ——

次の瞬間——。

青空に赤き羽がひらひらと舞い散った……。

card 5：夕暮れ

「ねえ、“祭り”って何？」

とてとと街中を歩きながら、菖蒲は振り向く。

後ろには、相変わらずぶすつとしているバルトと、堀の上を器用に渡るグリフがいた。

この街にはやはり“人”が居ないが、動物耳の人達がせつせつと機材を運んでいる。

バルトはその内の一人を避けると、菖蒲の顔を覗き込んで来た。

「あれ。まだ言って無かったっけ」

「聞いてないよ。何か街の人も忙しそうだし、グリフ君やバルトも“祭り”が……なんとかかんたらって言ってたじゃない？」

「待てこら。だから俺は“ベルト”じゃねえ、“バルト”だ」

バルトがギロリと睨み付けるが、堀を渡るグリフはケラケラ笑っていた。

この二人、性格も種族も全く違うのに良く友達でいられるものだ。バルトはため息を吐きながら、銀髪を掻く。

「“祭り”——ってのは、“虹夜祭”の事だ」

「……やさい？」

「そ。一年に一度、レインボーティアから天に向かって虹の柱が現

れる。しかも“陽が沈んだ後”にな。その変わった虹が出ないと、この街に平和は運ばれないって言われている」

確かレインボーティアとは街の中心にある噴水の事だ。
あの噴水から空に向かって直線の虹が伸びる。

一年に一度、虹の使者の涙をのせて、幸せを呼ぶ為に。

——でも。

「何でそんな現象が……」

「詳しい話は俺も知らねえけど、“虹の使者の想い”が虹となって神サマとやらに届けてるんじゃないの。その辺は“親父”とか“竹じい”に聞けば、後で詳しく教えてくれるさ」

菖蒲は何となく複雑な気持ちになり、軽く頷いておく。

先ほどのヘレンの様子を思い出し、どうにも気分が上がらない。

あの何かを求めるような哀しい目。

名を告げた時の泣きそうな目。

全ては一瞬の内に菖蒲へ飛び込んできたもの。

しかし、菖蒲の心に重荷となるには十分過ぎる内容だった。

——私には関係ない。

——早く帰る方法を見つけるんだから。

首をぶんぶんと横に振り、心の靄を振り払う。

しかし、一步踏み出した時に違和感を覚えた。

一瞬空気が冷たくなり、街の騒がしさが遠くなる。

——えっ。

いつの間にか、菖蒲は“街中”ではなく、“林の中”を歩いていた。

さっきまで、石タイルの西洋風な街中を歩いていたのに。

さっきまで、半獣の人々が走り回ってたのに——誰もいない。

木々が頭上でサワサワと音をたてるだけ。

戸惑う菖蒲に対し、バルト達は何事も無かったかのように菖蒲を追いついていく。

しかも彼らの背後に見えるのは、ホーリータウン。

ぱつぱつと、まるで色の違う折り紙を二枚で、継ぎはぎでもしたかのようだ。

「——ねえ。ココなんかおかしくない？」

菖蒲は小走りでなんとかバルト達に追いつく。

隣にいたグリフは、にこつと笑った。

「だって、ボクらは人様の屋敷内に入ってるんだもん」

“屋敷に入っている”。その一言の意味が分からず、首を傾げる。

「ココは“草壁家の中庭”だよ」

「ななな中庭？」

菖蒲は、思わず聞き間違いかと思った。

確かに“百合”という子に会いに行くのは聞いていた。

つまり“草壁家中庭”というのは、その子の敷地内という事なのか。

――馬鹿な。

――私は普通に街を歩いていただけなのに……。

――何で他人の敷地内になんか。

上を見上げた菖蒲は、目と口が同時に開く。

何故なら門は合った。

ちゃんと街との間に合った。

ただ、大きすぎただけだった。

――う、そ。

枝に隠れて見えにくいのが、柱が二本ちゃんと立っている。

だが、間は五十メートル以上で高さも半端ない。

ここからでは単なる黒い塊にしか見えないが、頂上は屋根状になっており、大きな表札が掛っているとバルトは言う。

「な、なんか色んな意味であり得ないんだけど……」

「草壁家はこの街一番の金持ちだ。ついでにグリフがさっきまで歩いていた外壁、あれもココのなんだ」

「ええッ」

菖蒲は軽く目味を覚えた。

ホーリータウンの全部を見たわけではないが、恐らくこの街の三分の一は、草壁家ではないかと思う。

同時に“百合”という存在が遠くに感じた。

いわゆる“凡人”と“お嬢様”の差というヤツだ。

菖蒲は気まずそうに目を泳がせる。

「ねえ、グリフ君、バルト」

「なあに？」

「なんだよ」

——会っ前からこんな事聞きたくないけど……。

「“百合”ちゃんって、どういう子？」

その質問に硬直する二人。

バルトは無表情で頬を掻く。

「どういう子って……」

そしてゆっくり菖蒲を指さした。

「アヤメより頭が良くて、アヤメより可愛いくて、アヤメより言葉遣いがしっかりした子」

ブチッ。菖蒲の額に血管が浮かび上がる。

ある程度の違いは予想していたが、ここまで言われると腹立たしい。

グリフはその隣で苦笑いしていた。

「まあバルト。確かに事実だけどはっきり言っちゃ駄目だよ」

——フォローのつもりか馬鹿ウサギ。

「そう、だな」

「でしょー。アヤメちゃんは、とっても可愛いんだから——ねええ？」

「……別に気を使わなくて良いわよ」

哀れみの瞳で見られた菖蒲は、顔を真っ赤にして林の中を進んでいく。

その後も、グリフが大声で『可愛い』だの、『愛してる』だの、赤面するようなセリフを吐くが、菖蒲は完全に無視した。

そんなこんなでやっと見えて来た、草壁邸。

いかにも歴史の古そうな木製の大きな家。

明治初期の豪邸のようなデザインに、玄関にも立派な彫刻がある。しかも改めて扉の所に『草壁』と表札が掛っていた。

——うわ。

——本物の豪邸だ……。

呆気にとられていると、バルトとグリフがすたすたと中に入っていく。

菖蒲も慌てて二人を追い掛けた。

「いいの？ 勝手に入っちゃって……」

「いいのいいの。いつもこんなだし」

「そーそー」

そうは言われても不安を隠せないのが人というものである。玄関に入るものの人っ子一人いないし、気配もしない。

外見は立派だが、人は住んでいないのではないかと思うほど。
菖蒲が不安げに背伸びしているとグリフがいきなり声を張り上げた。

「ゆうりいちゃああんッあっそびましょおお！」

——ガキか！

今時の子供でも、そんな誘い方はしないだろう。
無論、中からの反応はない。グリフは頬を膨らませ再び声を張った。

「はあやく出ないとお前の目ん玉ほじくるぞぉ！」

——なんでト○ロ！？

何故不思議の国でジブリアニメのセリフが出てくるか分からないが、色んな意味で不安になる。

菖蒲はツツコミ所の多さに堪えながら、隣にいるバルトを見上げた。

「ね、ねえ……本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって。いつもこんなだし」

——いや、君から一言止めてあげなよ。

変な所で常識に欠けているバルトに対し、菖蒲は絶望に近いものを覚える。

一見グリフの方が常識に欠けている部分が多いと思っていたが、

案外どつちもどつちなのかもしれない。

しかしあれだけ騒いだのにも関わらず、人が出てくる気配はない。
しーんと言った耳鳴りが、虚しく響くだけ。

「……やっぱり、いないんじゃないかな」

菖蒲が苦笑まじりにグリフの顔を覗き込む。
本人はぶくつと頬を膨らませているが。

「ちえツつまんないのお」

「もしかしたら街中にいるのかもな」

「……わたくしは、ここです」

「だよね。あれだけ騒いだら嫌でも聞こえるもん」

「アヤメちゃん、“嫌でも”って酷くない？」

「……わたくしは、ここにあります」

「仕方ない、もうすぐ日が暮れるし噴水前に行くか」

「……無視だけは、とても心が痛みます」

「そんな無視だなんて……——ぎゃあああッ！」

今頃になって、自分の背後に白い着物を着た少女が居たことに気付いた菖蒲。

思い切り尻もちをつき、玄関先に転んだ。

「お、おおお化っ……」

「よォ “百合” ツ花摘みに行ってたのか」

「じゃあ呼んでも来ない訳だね」

和気あいあいと少女を囲むバルトとグリフ。

状況が飲み込めない菖蒲は、一人呆然とするしかない。

——えっと……

——この子が百合ちゃん？

日本人形を思わせるような黒く長い髪。

白い生地にピンクの百合が描かれた着物。

百合は細い瞳を隠すように、白い頬の朱を隠すように、腕いっぱいの花に顔を埋めた。

「……わざわざ遊びに来てくれたのですね」

ゴニョゴニョと、かすれるような声で呟く百合。

見た目からも、きつと大人しい子なんだと思う。

バルトは微笑みながら、百合を見た。菖蒲と出会ってから、初めて見せた優しい笑顔をだった。

「まあ遊びに来たって言えばそうなんだけど。ちょっと聞きたい事があってな」

「……聞きたい事、ですか？」

バルトの視線が、菖蒲に移る。

それを追うように百合も、菖蒲を見つめた。

菖蒲は自分を指差しながら、戸惑うしかない。

——え、わわ私？

我に返った菖蒲は、慌てて立ち上がり砂を払った。

「わ、私は……えっとそのオ」

「こいつはアヤメ。今日会った」

「そうそう。面白いし、百合ちゃんと同じ花族なんだよオ」

隣にいたグリフが馴れ馴れしく菖蒲の腕を組んでくる。

当然振り払おうとするが、グリフの手がそれを許さない。

しかし動揺する菖蒲を無視して百合はにっこりと微笑んだ。

「……わたくしは、花族の“草壁 百合”と申します。同じ花族の方と会う機会がありませんので……わざわざ当家にいらっしゃった事、大変嬉しく存じます」

深々と頭を下げる百合に対し、菖蒲はどう反応して良いのかわからない。

確かにバルトが言ったように、百合は悲しいぐらい菖蒲よりもしっかりしている。

——私と年は同じくらいなのに……。
——しっかりしてるなあ。

まるで他人事のように感心する菖蒲。
するとバルトは菖蒲の肩を叩く。

「実はな。アヤメは花族らしいんだけど、記憶を無くしているらしいんだ」

「えっ」

「はぁッ!？」

驚く菖蒲と百合。

——てか、私は記憶喪失じゃないし！

初耳も初耳。

自分が花族という事になっていたのは知っていたが、記憶喪失の話は聞いてない。

「しかも、空から突き落とされたらしくてな……そのショックで今は名前しか」

「まぁ!」

「オイオイオイオイッ」

同情の目で見られた菖蒲は、慌てて手を前に出した。
何が起きているのか分からないが、とにかく話が大きくなっている。

菖蒲は三人を見渡しながら、声を荒げた。

「ちょ、ちよつと待つて皆誤解してるよ。私は、記憶喪失じゃない。私は花族でもない。本当は“人間”なの！」

暫しの沈黙。

バルトはポカンとしており、百合は硬直。

グリフは目をぱちぱちさせている。

息を切らしながら、菖蒲は皆の反応を待つしかない。

「アヤメちゃん……」

初めに口を開いたのは、グリフだった。

「頭大丈夫？」

「へ！？」

まさかの切り出しに菖蒲は絶句するしかない。

だいたいグリフに頭の心配されるなんて、それだけで一大事だ。

「アヤメちゃん、隠したいのは分かる。でも、嘘はいけないよ」

「アヤメさん……。なんだか可哀想……」

「ゆ、百合ちゃん！？」

「アヤメ。俺達はちゃんと分かってるから」

「ちょ、ちよつと才！」

菖蒲を囲み、力強く頷く三人。

よつするに菖蒲の主張は信じてもらえなかった訳だ。

——な、なんで信じてくれないの。

確かバルトは『不思議の国には人間はいない』と言っていた。
恐らくその主観から、『人間だ』と言う菖蒲の主張を信用しない
のだろう。

結局、この三人に何を言っても無駄という事。

——最悪だあ……。

がくりつと、菖蒲はうなだれる。

「——そういう訳で、花族の百合に聞けば、何か手がかり掴めるか
なっと思っただけど……」

バルトが申し訳なさそうに百合を見る。

だいたい菖蒲は花族でないのだから、百合に聞いても何も分かる
はずもない。

しかしどうせ何を言っても信用してもらえないので、菖蒲はぷい
っとそっぽをむいた。

「……香り」

百合が、小さく呟いた。

「……アヤメさん、『レインボーティア』の水と同じ香りがします」

「えっ？」

そっぽを向いていたが、慌てて自分の服の匂いを嗅ぐ。
あまり気にならなかったが、噴水の水しぶきでも掛ったのだろうか。

バルトは苦笑しながら、百合を見下ろす。

「うーん……。香りとかじゃなくて、アヤメを知ってるかどうか聞きたかったをだけど」

百合は、ぽかんとバルトを見上げる。

隣でグリフも首をすくめて、くすくすと笑う。

菖蒲は相変わらず、自分の服の匂いを嗅いでいる。

バルトは、小さくため息を吐いた。

「ま、いつか」

誰でもこんな者達に囲まれたら、聞く気も失せるだろう。
するとグリフは、ポケットから懐中時計を取り出した。

「おやおやバルト。もうすぐ祭りの開会式が始まるよ」

「ゲッ。そっぴや親父に夕方までに『噴水の所に来い』って言われてたんだ」

西の空を見れば、もう太陽が傾き、赤い海に飲まれていた。

バルトはチツと舌打ちをしながら、翼を広げる。

「俺はグリフと先に噴水の所に行く。アヤメ、お前は百合と一緒に歩いて噴水の所に来るんだ」

「ななन्दえ!？」

当然ながら、菖蒲は意味の分からない提案に抗議する。

——皆一緒に行けば良いじゃん。

百合の事は嫌いではないが、二人並ぶと自分が『ガサツ女』だと皆に見られそうで少し嫌だ。

しかしバルトもグリフも、二人を置いて行く気満々だ。

「馬鹿いうな。お前ら空飛べないだろ、歩いていたら本気で遅れちまう」

「グリフ君だって飛べないじゃん」

「こいつは『ウサギ族』だぞ？ 飛べなくても“俊足”があるんだよ」

にやりつと、バルトは笑いながらグリフの足を指さす。

菖蒲は、ぶーと頬を膨らますしかない。

「大丈夫だよ。ボク噴水前で待ってるし」

「じゃあそいう訳だから。アヤメ、百合を頼んだぜえ！」

「ちょ、ちよっとッ」

菖蒲の静止を聞かずに、鳥は飛び去り、ウサギは走り去ってしまった。

まさに、どひゅんツという効果音付きで。

菖蒲は手を伸ばしたまま、人間離れた奴らの背中を見つめてい

たが今は何もない。

——本当に行っちゃった……。

気まぜく残る、菖蒲と百合。

菖蒲はぎこちなく百合の方に首を向ける。

「ええつと……百合ちゃ」

「……わたくし達も行きましょう」

「へ？」

まさかの切り替えに、菖蒲は硬直する。

百合はにっこり微笑んでいた。

「……虹夜祭。とっても綺麗なんですよ。バルトさん達とも、あちらで合流出来ますし」

戸惑う菖蒲に、百合は手を差し出す。

「……わたくし達は、今日から『お友達』ですよね」

——『お友達』

この一言に、菖蒲はにっこり笑って手を取った。
白くて、とても柔らかい手。

礼儀正しく、でも菖蒲と同じ女の子。

「そうだね、私たちは今日から『友達』」二人の顔が、夕日に照

らされる。

「私は“宮原 菖蒲”。よろしくね」

こちらの世界に来てから、初めてまともな自己紹介をした。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

百合はぺこりと頭を下げた。

バルト達も友達だが、この世界で初めて出来た女の子の友達。例え自分が人間だと信じてもらえなくて良い。

いつかきつと、分かってもらえる日がくるから。

二人は微笑み合いながら、林の中を歩いていく。

すると人の気配のしなかった屋敷から、一人の老人が出てきた。

菖蒲達は話込んでいて、全く気づいていない。

老人は、地面にまで届きそうな白い髭を撫でながら、二人の背中を見つめる。

「フオッフオ。百合も虹夜祭に行ったか……」

だが今年は少し違うようだ。

いつもならバルトやグリフが迎えにくるはずなのに、今回は見た事のない“女の子”。

『レインボーティア』の水と同じ香りをした——“あの子”に似た女の子。

閉じていた瞳が驚愕に見開く。

「あ、あの子は……」

瞳に映るのは、菖蒲の笑顔——否、二十年以上前の一人の少女。

しかしそんなはずがない、とても言わんばかりに首を激しく振った。

あの子はもういない。

あの子は消えた。

虹の使者・“アイリス”は、もう――……。

記憶の光は、陸地に吸い込まれていく。



「な、なんだよ……コレ」

レインボーティアに辿り着いた、バルトとグリフは絶句する。
辺りが“赤い”。

夕日の赤より、更に深い赤。

街の住人達が、まるで桜の花びらのように道に散っていた。
暫し目の前の光景に硬直していたが、バルトは近くの電柱に寄りかかっていた鳥族を抱き起こす。

「おいッすっかりしろ。何が起きたんだ！」

額から血を流しながら、男は微かに口を開いた。

「……黒い、鎧が」

「黒い鎧？　なんだよそれ」

「——バルト」

今まで黙っていたグリフが、静かな声で友の名を吐いた。
バルトも異変に気付き、目を細める。

じやりつと、砂を踏みしめる音。

夕日の陰から覗く、ぐりぐりとした赤い瞳。

バルトは胸ポケットから銃を取り出し構える。

——数が多い。

「グリフ、何人ぐらいだ」

「分からない。でも十体以上はいるね」

グリフも険しい顔つきで、懷から鎖のような物を取り出す。
敵が何で、何が目的か分からないが、ホーリータウンの住人を襲ったのは明白。

これは治安課所属する者として、黙っている訳にはいかない。

——大丈夫。

——グリフもいるし、きっと親父もすぐ来るはず。

自分達だけで叶う相手ではないのは分かる。

強さは道に横たわる住人達が身を持って味わっている。
しかし持ち堪えられれば良いのだ。

ヘレンが来るまで、応援が来るまで。

「ああ……。ボク治安課じゃないんだけどなあ」

グリフが苦笑しながら呟く。

「今回だけは手を貸せ。後で礼はする」

「じゃあ今度バルトの家にお泊まり会ッ」

いつもだったら一発ぶん殴っているが、今はその余裕もなく頷くだけ。

グリフは分かっているので、苦笑していた。

そして無言のまま、バルトは白い翼を広げる。

「——行くぞ」

夕日を背に、黒い鎧が一斉に飛び上がる。

不気味な赤い瞳が、二人の少年を見下す。

この時のバルトは信じていた。

親父——ヘレンが、必ず助けに来てくれると……………。



菖蒲と百合は、夕日に照らされながら『レインボーティア』に向かっていた。

初めは上手くいくか不安だったが、今は何の心配もいらぬぐらい打ち解けあっている。

笑い合う二人。

しかし菖蒲は静かな街並みを見つめ、微かに違和感を覚えていた。

——なんだか街の人もいないし……………。

——凄く静かななあ。

人もいないし、音も声もしない。

昼間はあんなに賑やかだったのに、夕日に沈み、静けさに溺れる町並みはどこか不気味だった。

隣を見ると百合は相変わらずコロコロ笑っていて、気にしてもしない。

「アヤメさん、どうかしました？」

急に黙り込んだ菖蒲を心配したのが、百合が不安げに首を傾げた。菖蒲は首をすくめて、優しく微笑む。

「なんでもないよ」

「そうですか。急に黙り込んでしまったので、驚いてしまいましたよ」

「ごめんごめん」

菖蒲は軽く手をひらひら振る。

百合は安心したのかにつこり笑い、再び会話の続きを始めた。

百合の話は、主にバルト達の事だ。

バルト達は幼なじみで、友達のいない百合に声をかけてくれた。

だけど女の子の友達は菖蒲が初めてなんだよ——と。

一言一言が楽しそうで、百合は嬉しそうに笑っている。

彼女にとって、あの二人は大切な友人なのだろう。

「そしてバルトさんが止めたのに、グリフさんったら……」

「ああ、グリフ君ならやりそう」

菖蒲もつられて微笑む。

やはりこうしていると神楽や加奈りんの事を思い出し、どうしても不安になる。

あの化け物の前に置き去りにしてしまった菖蒲の親友達。

思わず表情も暗くなりがちになるが、なるべく百合には悟られないようにしていた。

——この子には関係ないもの。

——百合ちゃんに気を使わせるような事はしてはいけない。

菖蒲が一步を踏み出した時だ。

（アイリス）

リン……と鳴り響く鈴の音。
菖蒲は、思わず立ち止まる。

——えっ。

「アヤメさん？」

百合はいきなり立ち止まった菖蒲の顔を覗きこむ。
しかし、菖蒲は無言のままだ。

（アイリス）

聞き覚えのある声が、ずっと呼んでいる。
百合には聞こえない声が、辺りにこだます。

——この声は……。

（こっちだよ）

声と鈴の音が重なり合った。

菖蒲は、視線を感じて無意識に頭を上げる。

「あっ……」

夕日で闇に埋もれた路地裏。
そこに立つ一人の赤毛の少年。

（アイリス）

首に付けた鈴がリンとなる。

猫耳が風に揺れる。

鋭い視線が、菖蒲を魅了する。

少年はゆつくりと手を前に差し出して、微笑んだ。

（さあ——）

「——ま、待って！」

菖蒲は考えるよりも先に走りだしていた。

少年は再び闇の中へ歩き去っていく。

赤い尻尾が、曲線を描いて消えていく。

「アヤメさんッ」

百合が背中に叩きつけられる。

しかし振り向く事も出来ない。振り向いていたら、彼を見失ってしまう。

——あ、あの子は……。

菖蒲は息を切らしながら思う。

——夢の中で。

——旧校舎で私を呼んでいた人。

確信なんてない。

でも声は同じだった。

昨日の夢の中、旧校舎に現れた“猫”の声と同じだった。

だからこそ、彼を見失う訳にはいかない。
全てを聞かなくてはいけない。

――何故、君は私の前に現れたのか。

――何故、私を“アイリス”の名で呼ぶのか。

――何故、私がこの世界に飛ばされたのか。

きつと、彼に聞けば分かる。

菖蒲は、全力で赤毛の少年を追っていく。

血のような真っ赤な空の下――凜と響く鈴の音に合わせて銃声が
鳴り響く……。

card 6：想い

「——くそッ」

バルトが息を切らしながら毒付く。

その額からは汗が滴り、緊迫の世界を狭ばせた。
そう、冷や汗。彼は焦っていた。

目の前でもそもそとうごめく銀の兜をはめた黒い敵。手には鋭い爪の付いた手甲をはめ、夕日のせいかソレは血の色に輝いて見える。
そして今、疲れの色を見せるバルトに、敵は容赦なく手甲を降り振り下ろそうとしていた。

「——チッ」

バルトは足首に固定していた銃を取り出し、両手に一丁ずつ構えたまま横にずれる。

そして地を蹴り、着地するまでの間に幾度となく引金を引いた。

弾丸は耳を引き裂くような音を発てて、五体の敵に命中。

どれも急所を撃ち抜いた、完璧な狙撃だ。

しかし——……

「うあッ」

肩を擦る手甲。

撃ち抜いた敵は倒れもせず、逆に体制を崩したバルトに斬りかかる。

――駄目だ。

――銃じゃ相性が悪すぎる。

敵は異常だった。鎧を着用していない黒い身体は、弾に撃ち抜かれてもすり抜けるだけ。

全くダメージがないのだ。

もちろん頭部の兜を狙ってたが当然ながら弾は弾かれる。

赤い瞳を狙ってみたが、やはりすり抜けるだけ。

攻撃が効かないのだからバルトは後退するしかない。

――ヤバいな。

――残りの弾が少ない。

『その場しのぎに過ぎない』。その思いが、結果として銃弾を無駄に使うてしまう形になった。

実に浅はかな判断だった。

事実、すぐに来ると信じていた治安課の仲間や、父親――ヘレンも来ない。

敵は数十体。いつもなら見回り役が空から街を監視し、いち早く敵の存在を教えるのに。

いつもならそれを聞いたヘレンが直ぐ様治安課を派遣するのに。

明らかにおかしい。

だからこそ、焦っていた。

顔にこそ出さないが、不安は限界に達していた。

――大丈夫。

——まだ諦めるな。

バルトは冷や汗を拭い、銃を握りなおす。
気が付けば、先ほど撃ち抜いた五体の黒い敵がじりじりと距離を縮めていた。

バルトは息を切らし、再び銃の引金に指をかける。
しかし——。

「バルト、撃つな」

突然、響いた友の声。

次の瞬間、“鎖”がバルトの目の前を通り過ぎる。
その鎖は今にも襲いかかりそうな黒い敵の兜部分に巻き付き、動きを封じた。

しかも鎖自身に意思があるかのように遠心力を使って、バルトを取り囲んでいた五体全員に巻き付いていく。

——これは……。

黒い鎧は釣りのようにくいつと持ち上げられる。

まさに一瞬の惨劇。

ふわりと持ち上げられた身体は、そのまま重力を存分に使い、頭から石タイルの地面に叩きつけられた。

あまりの衝撃に石タイルは粉々に破壊され、敵の兜もぼこりと大きくへこむ。

まるで五体の鎧はガラクタのように地に伏せ、弱々しく身体を震わせていた。

同時に、破壊の余韻が収まらぬまま回収される“鎖”。

その先端に付いている“懐中時計”。
まるでメジャーのように次々と鎖を呑み込みながら、ソレは主の
元へ戻っていく。

「ふう。大丈夫だったかいバルト」

グリフがパシッと懐中時計を手で受け止めた。
そして額から流れた血を拭いながら、にっこり笑う。

「……助かった。ありがとうグリフ」

バルトは銃を降ろし、ほっと息を吐きながら友に駆け寄った。
グリフの身体は傷だらけで、眼鏡にもヒビが入っていた。
まあバルト自身、あまり人の事は言えないが。

「治安課の人たちは？」

「駄目だ、無線をいれても応答がない」

バルトは目を伏せ、ベルトに装着している無線に触れた。
グリフはこの街の非常事態を察し、眉間にシワを寄せる。

「ヤバいな……。もしかしたら治安課が——いや、役場自体がダウ
ンしてるのかも」

「な、に……」

「だってそうだろ。ボクらが闘っている間、応援も来ない。応答も
ない。理由は一つ——“治安課自体が壊滅している”としか考えら
れない」

「——ッ」

冷静に推測を述べるグリフから、バルトは目を反らす。彼自身も気づいていた。ただ、信じたくなかった。今まで街の治安課が折れる事など、有り得なかったから。

「じゃあ、親父は——……」

——その非常事態を伝えに来ない親父は。
——あのクソ親父は。

グリフは首を横に振り、バルトから視線を外した。

「ヘレンさんの事は、ボクには分からない」

目を伏せていたバルトだが、不意に殺気を感じて振り向く。背後では先ほど地面に叩き付けたはずの黒い鎧がザワザワと立ち上がり始めている。

兜は半壊し、口も鼻もない真っ黒な顔が晒されているが、それほどダメージは受けていないようだ。

グリフはバルトに背を向け、再び懐中時計の鎖を伸ばす。

「でも、一つだけ分かるとしたら……——」

いつもは笑ってばかりなのに、身も凍るような冷静な瞳。

「遠距離、中距離戦向きなボクらにとって“こいつら”は相性が悪すぎる。ましてや数も多い。……力尽きるのも、時間の問題だ」

その意見にバルトも同感だった。

どんなに銃の腕が良くても、いくら鎖を自由自在に操れても、接近戦には向いていない。

ましてや敵は兜の部分しか打撃技を受けない。

どう考えても、今の自分達にはこの化物共に勝てる訳がなかった。

——でも俺は。

バルトは銃をしまい、直ぐ隣で崩れていた屋台の瓦礫に手を伸ばした。

そこから引つ張りだす、鉄パイプ。

ずしりと来る重みに耐えながら、一・二回それで空を斬る。

グリフはそんな友を隣に思う。

こいつまさかと。

「それでも……“戦うしかない” そう思うんだ」

バルトは弱々しく、また哀しげに微笑んだ。

それは治安課としての意地、街への想いから来た必死の決意。

グリフはヒビの入った眼鏡をかけ直し、また苦笑する。

「そういうと思ったよ」

二人は再び敵に向き直る。

黒い鎧達は赤い瞳をギョロつかせ、二匹の獲物を舐めるように見つめている。

しかし、その視線が一瞬横にずれたのをバルトは見逃さなかった。

——なんだ？

全くの予想外だった。

いや、誰が予想しただろう。

バルトの顔が引きつる。

だって“彼女”は立っていた。

この荒れ果てた戦場の隅に立っていた。

白い着物を揺らし、怯えたように顔を引きつらせる少女。

“百合”が、そこにいた。

「ゆ、百合ッ！」

「百合ちゃん！」

バルトもグリフも、突然現れた百合に驚きを隠せない。

今すぐ駆け寄りたいが背を向けた瞬間、黒い鎧はバルト達の身を斬り刻むだろう。

バルトは目線を化物共に向けたまま声を張った。

「馬鹿ッ早くここから離れろ！」

「……あ……う」

百合は恐怖に足がすくみ、動けないのか涙目でこちらを見てる。それもそのはずだ。祭りを楽しみに来たのに、建物は崩れ、住人は倒れ、そして大切な友人が見た事もない生物に取り囲まれているのだから。

この事態に、グリフも焦りを隠せない。

「おい、アヤメちゃんがないぞ」

「馬鹿なッ」

思わず振り向くが、菖蒲の姿はどこにもない。一緒に来るように言ったはずなのに。

——アヤメの奴、どこに行ったんだ！

早く百合を安全な所に行かせなければ。気持ちの焦りが、冷や汗となって吹き出す。

しかし黒い鎧達は、顔をひくひく揺らし百合の方を向いていく。完全に二人から狙いが反れた。あきらかに百合を狙っている。それでも動かないのは互いを止めている緊張という名の糸。本気で視線を交して、かろうじて繋ぎ止めている一本の糸。視線を少しでも外せば、その命綱は切れてしまうだろう。

——でもッ。

バルトは歯を噛み締め、足を引いた。

「——ちくしょオオッ」

「バルトツやめろ！」

グリフが悲鳴に近い声を上げる。

しかしバルトは走っていた。

敵に背を向けて、百合の元へ走っていた。

繋ぎ止めていた糸が切れ、黒い鎧が一斉に飛び上がる。

――間に合えッ。

背中に感じる鋭い殺気。

――間に合えッ。

どちらが早く百合に辿り着くかも分からない。

――間に合ええッ！

バルトは声を荒げながら、たった一人、恐怖に震える百合へ手を伸ばす。

後少し。

後少しで、手が。

髪が。

肩が――ッ。

「ユリiiiiッー！」

息も付かずに、百合の身体を抱きしめる。
ふわりと漂う花の香り。

——間に合った。

腕の中で、百合がそつと顔を上げた。

「ば、バルトさ……」

もう大丈夫。俺が守るから。
そう安心させるかのように微笑んだはずなのに、口元が上手く上がらない。

その口からこぼれる赤い血。

思わず顔が引きつった。

脇腹に突き刺さる、手甲。

黒い鎧が、カタカタと笑う。

「くそ……た、れ」

バルトの足から、力が抜ける。

赤い空がぐるりと一回転する。

深海に沈んで行くような錯覚。

グリフが、百合が、叫ぶ。

でも答えられない。

声が出せなかった――……。



――
ぶわあッ。

花畑に吹き抜ける風。

花は線上に波打ち、花びらが蝶のように空を飛ぶ。

ここはバルトと初めて出会った花畑。

菖蒲は、その中で立っていた。

一人息を切らし、目線を一点に集中させている。

その先にいるのは、“赤毛の少年”。

しかし少年は、ただ宙に浮かんだ色彩の蝶を見つめている。

二人の間に流れる沈黙。

一体どれだけの時間を沈黙で埋めただろう。

でも何を話していいのか分からないのだ。

——せつかく追いついたのに。

——せつかく目の前にいるのに。

——せつかく話が出るのに。

菖蒲は、ギュッと拳を握りしめる。

——逃げちゃ、いけない。

この少年に聞けば、何か分かる。そう思ってここまで追い掛けて来たのだから。

「あ、あのッ」

少年の視線が蝶から菖蒲に移る。

「あなたは……だれなの？」

他にまともな質問が浮かび上がらなかった。

赤毛の少年は、キョトンとしていたが優しく微笑む。

「僕かい？」

透き通るような金色の瞳。

そして、ゆっくりとこちらに歩みよる。

首をすくめ、苦笑しているようにも見えた。

「僕の事なら……君の夢で少し言っただけなんですけど」

「ほえ!？」

まさかの切り返しだった。

思わず顔が赤くなり、なんだかとても恥ずかしい。

だいたい夢の中の事なんて、今更覚えているはずがない。

それでも菖蒲は必死に思いだそうと、頭をかかえてブツブツと独り言を呟く。

「な、なんだっけ……。あッ“アホ毛”の——」

「うん。“赤毛”の『ノーティ』だよ」

ノーティはくすくすと笑った。

菖蒲は顔を真っ赤にして、硬直するしかない。

——アホだ、アホやん私ッ。

失礼極まりない自分。思わず自己嫌悪する今日この頃。

しかし今はそんな事はどうでも良い訳であり、菖蒲はブンブンと首を横に振った。

とりあえず咳払いをし、気を取り直す。

「『夢の中で言った』……って、やっぱりあなたが」

「そうなるね」

「旧校舎に居た猫。あの猫もしかして——」

「そう。アレは僕が周りに怪しまれないように変身した」

「なんで？」

その問いに黙り込むノーティ。

相変わらず風は吹き続け、花びらが宙に舞う。

ノーティは困ったように頬を掻き、目を泳がせる。

「僕には、君が『必要』だから……」

「——は？」

何を言っているのか分からなかった。

『必要』の意味が分からなかった。

グリフが良く言っているような悪ふざけなのか。

でも、夕日に背を向ける少年の顔は本気だ。

「アイリス、君には僕と一緒に闘って欲しい敵がいる」

「闘って欲しい……敵って？」

「今はまだ何も言えない。——けど、『デイスフィア』という呪われた種族が蘇ってしまった」

菖蒲はいきなりの事に呆然とするしかない。

闘い。敵。蘇った。

どれも菖蒲には関係ない事で、菖蒲にはどうする事も出来ない現実。

「君は聞いたはずだ。あの鳥族の少年に」

「——えっ」

「今から二十四年前、この国はとてつもない“邪”に襲われていたと……」

その話に、菖蒲は小さく頷いた。

——確か不思議の国は邪に襲われていた。

——けど、『虹の使者』が邪を取り除いたと……。

「それが、どうしたの？」

「今、現代に過去と同じ事が起ころうとしている」

ノーティはぐつと息を止め、悔しさを、過去を噛み殺す。

その迫力に、思わず息を飲んだ。

「だから、君には僕と一緒に闘って欲しい……」

「——え」

「全てが、“あの時”のように手遅れになる前に。僕には君しか——」

「ままま待つて！」

菖蒲は手を前に出し、話に歯止めをかける。

急に話を止められたノーティは、目をパチパチさせるばかり。

菖蒲はゆっくり深呼吸し、そして顔を上げた。

「ちょっと、意味が分からないよ。私は全然闘えないし、私はホン

トに普通の女子高生だし……。それより元の世界に帰りたいの、加奈りん達の所へ返して」

ノーティは、無言でこちらを見ている。

その顔はとても悲しそうで、とても切なくて。

菖蒲の心が、一気に締め付けられる。

——なんで……。

——この世界の人たちは、こんなに悲しそうな顔をする。

「元の世界へ、帰りたいのかい……？」

菖蒲は声が上手く出せず、頷いた。

「……帰るのは簡単だ。ゲートをくぐれば良い」

「ゲート……？ それはどこに——」

『でも、君が帰れば多くの命が犠牲になる』

不意に菖蒲の背後を指さすノーティ。

そこには、周囲を囲う木の隙間から見えるホーリータウン。

何かを感じた菖蒲は、誘われるまま花畑を横切り、その風景に近づく。

全身に悪寒が走った。

——ウソ、だ。

そこから見えたホーリータウンは、黒い煙に包まれていた。
建物は崩れ、子供の悲鳴がこちらまで聞こえる。

止むことを知らない銃声と怒声。

菖蒲は、あそこで溢れ返る血の臭いまで想像してしまった。
ねつとりと吐き気に、なんとか胸を押さえ付けて堪える。

菖蒲の目は、恐怖に震え、瞬きすら出来ない。

「——『君が帰る』。でもそれは……この世界の人々を見殺しにする事になる」

——いや……。

「それだけじゃない。デイスフィアがこの世界に溢れ続ければ、ゲートを通って君の世界にも現れる」

——いや。

『君は、大切なモノを全て失う』

「私には関係ないッツ！」

菖蒲は耳を塞ぎ、目を閉じ、そして叫んだ。

夕日の空に響く、少女の苦悩。

菖蒲はひたすら、首を横に振った。

「私には……関係、ない」

「君は、昔からいつもそうやって逃げて来たよね……」

「知ったような口聞かないで……ッ」

「知ってるよ。僕は君がお婆様に育てられた時から、あの世界で君を見守っていたんだから」

「——ッ」

菖蒲は、涙目で後ろにいるノーティを振り返った。

ノーティは、笑いもせずただ『ごめんね』と言った。

——全て決まっていたというのか。

——十六年前から、この世界に迷い込む事が。

「だから、僕は君を知ってる。悪い所も、良い所も——」

「……私には、何も力はない」

「君は力を持っている。『虹の使者・アイリス』の力を受け継いでいる」

ますます訳が分からなかった。

戸惑う菖蒲を目の前に、ノーティはただ苦笑するだけ。

「あ、いりす……?」

「そう。君が受け継いだ名前」

菖蒲は、間抜けな顔をしてノーティを見上げる事しか出来ない。

“アイリス”は『虹の使者』の名前なのは分かった。

でも何故、菖蒲がその名を継ぐのだ。
何故、力を受け継いでいるというのだ。

そんな力など、自分にあるはずがない。

「――君にしか、出来ない事がある」

それでも確信に満ちた声が背後で響く。

「――時間がない。こうしている間にも、君は『大切なモノ』を失
おうとしているんだ」

目の前で崩れ行くホーリータウン。

あの中には、バルト達がいる。

置いて来てしまった百合がいる。

「君には……僕と同じ想いをさせたくないんだ」

ノーティの手が、優しく菖蒲の頬を撫でた。

とても冷たく、微かに震えていた。

――ノー……ティ。

「早く行つて。君は運命を変えなくちゃいけない」

手が離れ、ノーティはゆっくりと後ろに歩きだす。

菖蒲を置いて、夕日に背を向けて。

また一人、暗闇の中へ帰ろうとしている。

「自分を信じて……」

「の、ノーティツ」

“置いて行かれる”。

急に怖くなつた菖蒲は、必死に手を伸ばす。

まるで迷子になつたような——『母さんに捨てられたような時』
と同じ心の痛み。

「大丈夫」

駆け寄つて来る菖蒲に、ノーティは優しく笑つた。

「また会いに来る。力を授かり、決意した頃に……。」

「無理だよッ私なんか——」

『僕は、いつでも君の近くにいるよ——忘れないで……』

すつ……。

菖蒲が抱きしめようと手を交差させるが、腕の中には何もなかった。

菖蒲は齒をくいしばり、今にも溢れそうな涙を堪える。

ノーティは、酷い。

言うだけいって、すぐまたどこかへ消えてしまふなんて。
まだ聞きたい事もたくさんあつたのに。

——私は、どうなるんだろう……。

正直、帰り方もいまいち分からない。

でも自分が元の世界に帰れば、『大切なモノ』を失う。
こちらの世界も、元の世界も――。

菖蒲は、壊れ行くホーリータウンを涙目で見つめる。

――バルト達……大丈夫かな。

バルトは治安課所属だと言っていた。

ならば、闘っているのかも知れない。

呪われた種族・『デイスフィア』という者達と。

ぞくつ。

背筋に、不気味な寒気が這い上る。

胸が締め付けられ、嫌な予感が止まらない。

――な、なんだろう。

――嫌な予感がする。

訳は分からない。でも、のんびりしている暇はない。

菖蒲は涙を拭い、花畑を走りだした。

空気は生温く、汗がべたつく。

菖蒲は嫌な予感で、心が押し潰されそうになった。

――なんでこんなに胸騒ぎがするんだろう。

その予感に後押しされ、菖蒲は更に足を早める。

空はもう、赤色から青紫に変わり初めていた。森は、日が沈んだ
せいでかなり薄暗い。

「――ッ」

菖蒲は太い木の根に足を取られ、顔面から地面に転んだ。
じんじんと鼻が痛み、顔が泥で汚れていた。

今の自分には、『大丈夫？』と声を掛けてくれる人がいない。
それがまた涙が誘って、菖蒲の心を締め付けた。

――ノーティは、何で私を“監視”していたんだろう。
――何故。十六年も、ずっと……。

菖蒲は伏せたまま身体を震わせ、ぐしッと涙を拭う。

――いかなきゃ。

擦り剥いた足を摩りながら、再び立ち上がる。
彼女は必死だった。
早く皆の顔が見たかった。

ただ一言。

『君には……僕と同じ想いをさせたくないんだ』

ノーティの悲しい表情が、頭から離れなかったから。
菖蒲は走り続ける。
呼吸が苦しい。
前が見えない。
心臓が割れる。

耳に響く自分の息切れを聞きながら、次第に見えてくる門。
ホーリータウン入り口。

――バルトツ。

菖蒲は門に激突するかのように手をつき、足を止める事なく街の中へ入る。

中はまさに地獄絵だった。

至る所で建物が崩れ、燃え、酷い場合には住人が建物の下敷きになっている。

子供も母親を求め泣き叫び、その度に菖蒲の鼓膜と心を痛ませた。それでも、菖蒲は目を反らして走り続ける。

自分には行かなくてはいけない場所がある。

会わなくてはいけないヒトがいる。

もし今、目の前にいる人々を助けていて、バルト達に一生会えなかったらきつと後悔する。

――だから私が立ち止まっちゃいけない。

菖蒲は血溜りを飛び越え、弱々しく手を伸ばす住人を追い越し、友人の元へ急ぐ。

虹夜祭の舞台である『レインボーティア』へ急ぐ。

菖蒲は今にでも、泣きそうだった。

――お願いッ

――間に合って……ッ。

目的地は、祭りの舞台——レインボーテア。
菖蒲は身体で風を切りながら、全力で街中を駆け抜けていく。



「ア……」

止まる時間。

目が、落ちてしまいそうなほどに極限まで見開く。

噴水前は、黒い鎧——デイスフィアで溢れかえっていた。
何体かは噴水にへばりつき、他は一人の少年に集中攻撃している。

グリフだった。

「あ、アヤメちゃん!？」

グリフは菖蒲に気づき、鎖で敵を弾きながら振り向いた。

しかし、菖蒲にはどうでも良かった。

気になっていたのは足元でうずくまる百合——の腕でぐったりと

赤色に染まっている者。

菖蒲は、よたよたと歩きだす。

「アヤメちゃん、こっちに来ちゃ駄目だ！」

グリフが叫ぶが、菖蒲は立ち止まらない。

今の菖蒲には、自分の身の心配なんてする余裕がなかった。

菖蒲は鳴吐をもらしながら、百合の元へ向かう。

——ウソ、だ。

途中、デイスフィアが菖蒲に手甲を振り上げる。

グリフが直ぐさま鎖を放とうとするが、思わずその手が止まった。

菖蒲は切りつけられる前に素手で手甲を握り受け止めていたのだ。

ポタポタと地面に流れ落ちる赤い雫。

グリフは呆然と彼女を見つめる事しか出来ない。

「……どいて」

たったその一言だけ呟き、菖蒲はデイスフィアから手を離す。

そして硬直するデイスフィアを追い越し再び歩き出した。

その瞳にはもはや光は宿っていなかった。そこにあるのは涙と、殺気を越えた哀しみ。

デイスフィアは泣きながら進む少女に何かを感じたのか、サー…

…と一斉に彼女から遠ざかっていく。

——ウソだ。

周囲が凍りつく中、菖蒲は百合の前に立つ。

自分を覆う、影に気付いた百合。

百合は身体を震わせながら、赤く腫れた瞳を上に向けた。

「あ、アヤメさん……ッ」

弱々しく、今にも消えそうな声。

唇を噛み締め、彼女なりに熱い想いを堪えている。

「わわたくしのせいで、バルトさん……バルトさんがッ」

真っ赤に染まった腕を、ゆつくりと広げる百合。

菖蒲は、絶叫しそうになるが息を止めて堪える。

「うああ……ッ」

膝に抱かれていたのは、腹部から大量の血を流す“バルト”。
顔は青白く、銀髪にも血がつき、周囲にはバルトの羽が雪のように散っている。

赤い雪に埋もれた少年。

爪の割れた指で、そつと頬を撫でるがバルトは目を閉じたままだ。

「ううッ……」

菖蒲はガクリと血溜りに足を沈ませた。

——私のせいだ。

この世界で初めて出会ったバルト。

——私が百合を置いて行っただから。

——約束を守らなかったからッ。

いつも文句ばかり言っていたが、なんだかんだ優しくしてくれた。本当はもっと怪しむべきなのに、まるでこの世界の友人のように接してくれた。

でも今は、その身体が段々と冷たくなっていく。

「いやだ……」

菖蒲のせいで。

「いや、だあ……ッ」

菖蒲のせいで。

「いやだよお……ッ」

約束を、守らなかったせいで——ッ。

『君は、大切なモノを全て失う』

「——うわあああああッ」

菖蒲が、絶叫をあげながら涙を流す。

今まで歯止めをかけていた何かが切れ、心のダムは決壊を続ける。

「うあああああッ！」

グリフも百合も、ディスプレイまでもが絶句していた。

それでも菖蒲は泣き続ける。

自分の泣き声で、この世界の音の全てを掻き消した。

涙が、大粒の雨のように地面に溢れる。

同時に視界の隅で、虹色に輝きだすレインボーティア。

「……な、なんだ」

グリフは異変に気付いた。

何やら地響きが、している。

しかも噴水にへばりついていたディスプレイは、一瞬にして蒸発した。

光増して行くソレは、まるで菖蒲の涙に共鳴しているかのようにだった。

「うわあああああッ！」

菖蒲の周囲が虹色に輝きだす。

光が渦巻き、風が巻き起こり、菖蒲の座り込んでいるブロックの地面が破壊され宙に舞う。

泣き声で、街の窓ガラスが一斉に割れる。

その気迫に、グリフは本能的に百合とバルトを掴んで菖蒲から離れた。

菖蒲を囲む虹の柱が、渦を巻きながら天へ登っていく。

「あ、あの子は……一体」

グリフは、呆然と菖蒲を見つめる事しか出来ない。

するとレインボーティアから放たれていた虹の光が、一点に収縮されていく。

『もう泣かないで、君は強い子だから』

菖蒲の中で響く、不思議な声。

菖蒲は閉じていた瞳をゆっくり開く。

『君は優しい子』

『君は思いやりのある子』

『君は仲間の為に泣ける子』

『そして、“幸せを運ぶ者”』

その光が、菖蒲に飛んで来る。

ふわふわと浮かぶ不思議な光は、そつと菖蒲の手の上に収まった。
泣いていた菖蒲も、これには戸惑いを隠せない。

「コレは——」

『君に力を授けよう』

手の平に浮かび上がる光が消え、落ちて来たのは“一枚のカード”。

トランプの“スペードのエース”。

カードを手にした菖蒲は、ただじつと見つめる事しか出来ない。

『さあ唱えて』

「唱え、る？」

『 “スペードのエース、召喚”と……』

菖蒲は、ただカードを見つめ握りしめる。

何が起こるのか分からない。

でも、今の自分に出来る事ならなんでも良かった。
バルトの仇を、取れるならばなんでも良かった。

だから菖蒲は涙を拭い、カードを掲げる。

これ以上、皆を苦しめないように。

運命を変える為に――。

「『スペードのエース召喚』ッ」

カードから溢れだす光。

もう後には引けない――本能的にそんな事を思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2260k/>

不思議の国のアイリス ~ Iris in Wonderland ~

2010年10月8日22時22分発行